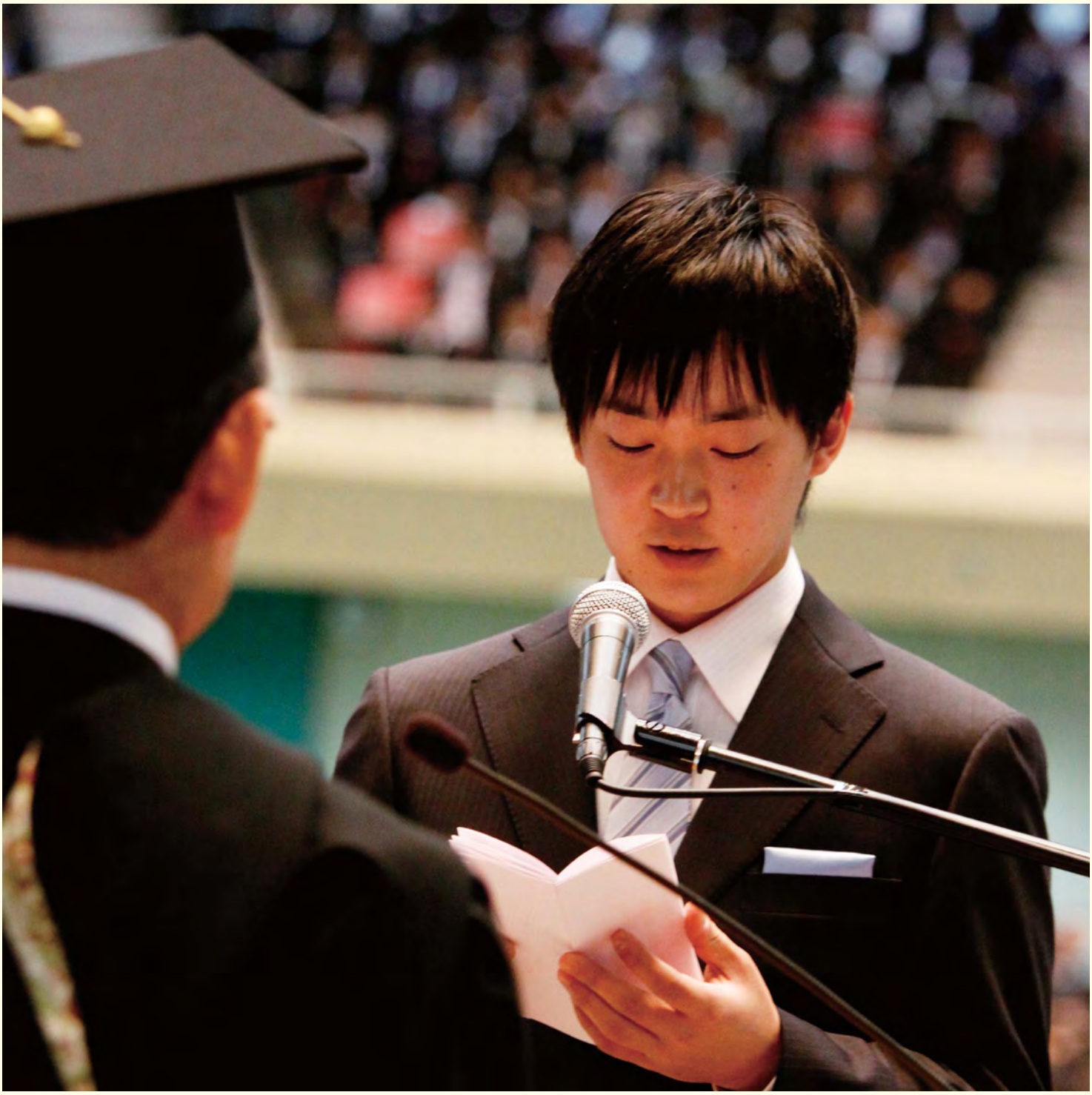
# 学内広報

2013.4.23 no.1438



平成25年度役員等の紹介
平成24年度卒業式・学位記授与式
平成25年度入学式・大学院入学式
東大を海外へ広めるために —英語略称をいま一度考える—

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

# 平成25年度役員等の紹介

平成25年度役員等を以下のとおり紹介します。

**総長**
**(任期)平成21年4月1日～平成27年3月31日**

濱田 純一

**理事・副学長**
**(任期)平成25年4月1日～平成26年3月31日**

前田 正史
(担当)総務・事務組織、財務・施設

佐藤 愼一
(担当)総合的な教育改革の推進、教育、入試

松本 洋一郎
(担当)学術戦略の企画・実行、研究推進、大学院強化、病院

長谷川 壽一
(担当)学生、評価、環境安全

大和 裕幸
(担当)コンプライアンス、危機管理、産学連携、柏地区整備推進

**理事**
**(任期)平成25年4月1日～平成26年3月31日**

江川 雅子
(担当)社会連携、広報、国際特命

磯田 文雄
(担当)人事労務、法務、監査、情報システム

**監事**
**(任期)平成25年4月1日～平成26年3月31日**

有信 睦弘

桝田 淳二

**副学長**
**(任期)平成25年4月1日～平成26年3月31日**

北森 武彦
(担当)理系人材国際、環境安全本部長

五神 真
(担当)学術研究システム改革・戦略企画、大学院強化

永田 敬
(担当)教養教育、進学振分け制度改革

羽田 正
(担当)国際本部長、懲戒

福田 裕穂
(担当)入試改革、入試企画室長

野城 智也
(担当)TSCP室長、建設エンジニアリングオフィス統括、初中高等教育連携

吉見 俊哉
(担当)教育企画室長、大学総合教育研究センター長

**副理事**
**(任期)平成25年4月1日～平成26年3月31日**

清水 秀久
(担当)渉外本部長

鈴木 敏之
(担当)経営企画・教育制度(経営支援担当部長)

苫米地 令
(担当)人事制度企画(人事部長)

中塚 数夫
(担当)経理・調達

平井 明成
(担当)キャンパス整備、資産管理(資産管理部長、施設部長)

宮川 光雄
(担当)柏地区事務機構(柏地区事務機構長)

**総長顧問**

小宮山 宏

根岸 英一

清水 孝雄

武藤 芳照

**総長特任補佐**

加藤 道夫
(担当)キャンパス計画

中井 祐
(担当)復興支援、国際宿舎

難波 成任
(担当)EMP

**総長室顧問**

山田 興一

岡本 和夫

内藤 廣

ステファン ノレーン

杉山 健一

尾越 和博

**総長特別参与**

斉藤 延人

# 新役員等の略歴および就任の挨拶

新理事・副学長、新副学長、新副理事の略歴および就任に当たっての挨拶を以下のとおり掲載します。

理事・副学長

## 長谷川 壽一

昭和51年3月 本学文学部卒業
昭和54年11月 国際協力事業団派遣専門家（タンザニア国野生動物調査官）
昭和59年3月 本学人文社会科学研究科博士課程単位取得退学
昭和59年4月 本学教養学部助手
平成3年10月 本学教養学部助教授
平成11年4月 本学総合文化研究科教授
平成23年2月 本学総合文化研究科長・教養学部長
平成25年4月 本学理事・副学長
専門分野：比較認知科学、行動生物学、進化人類学
研究内容：
1) Hasegawa Toshikazu "Rise and fall of political complexity in island South-East Asia and the Pacific." Nature 467 (2010):801-804.
2) 長谷川寿一（共著）『進化と人間行動』東京大学出版会, 2000年

### 理事・副学長就任にあたって

2年間の総合文化研究科長・教養学部長の後（1ヶ月半の小休止を挟んで）、理事・副学長を拝命しました。私の担当は、大きなくくりでは学生、評価、環境安全で、それぞれ武藤前理事、佐藤理事、清水前理事から引継ぐこととなりました。学生担当では、学生支援、奨学厚生、キャリアサポート各課等と共に、学生・大学院生諸君が充実し、意義ある生活を送れるように支援、応援します。評価担当では、法人評価、認証評価、教員評価の三本柱で本学の一層の質の向上につながる評価を実践したいと思います。環境安全は、東日本大震災以降、ますます重要になった防災、安全管理に加えて、学生・教職員の保健・健康推進に尽力します。学生相談体制の充実は大きな課題だと認識しています。その他、教養学部の新しいプログラムであるPEAKとFLYも担当し、後押しします。この二つのプログラムを通じて、新しいタイプの東大生が育っていく姿を見ることを楽しみにしています。最後に、入学時期等の教育基本問題に関する検討会議では、昨年度に引き続き座長代理として総合的な教育改革のグランドデザイン策定に参画します。東大が世界のトップユニバーシティに踏みとどまり、さらに上を目指せるか、またはずるずると後退してしまうのか、今年度がまさに正念場です。これらいずれの課題についても教職員、学生・大学院生の全構成員と協働していく所存ですので、どうぞよろしくお願いいたします。

理事・副学長

## 大和 裕幸

昭和52年3月 本学工学部船舶工学科卒業
昭和57年3月 本学大学院工学系研究科船舶工学専門課程修了 工学博士
昭和57年4月 科学技術庁航空宇宙技術研究所（現JAXA）入所
昭和63年11月 本学工学部助教授
平成9年7月 本学大学院工学系研究科教授
平成11年4月 本学大学院新領域創成科学研究科教授
平成21年4月 本学大学院新領域創成科学研究科研究科長
平成24年4月 本学柏図書館長
平成25年4月 本学理事・副学長
専門分野：産業環境学、交通システム、知識情報システム
研究内容：
1) 大和裕幸・中田圭一編、『人工環境学』、東大出版会、2006年.
2) 大和裕幸他、「オンデマンドバス　～公共サービスに於けるイノベーション～.」『オペレーションズ・リサーチ　経営の科学』、平成18年（2006）：579-586.

### （コンプライアンス、危機管理）＋（産学連携、柏地区整備推進）

このたび、理事・副学長を拝命いたしました。担当は題名にある４つの分野です。教育、研究そのものというより、その基盤の確保、整備を担当いたします。コンプライアンスは明るく闊達な教育研究環境を確保する努力、危機管理は事故・災害への備え、情報セキュリティ管理などが含まれます。産学連携は大学の研究成果を社会に生かすとともに社会の実情を教育に反映させる機能でもあります。柏地区では東京大学の意図を具体化する計画を確定し、実行することが必要です。題名の最初の括弧は現下の問題対応、後の括弧は将来計画です。教育ではタフでグローバルな学生の育成、研究では世界をリードする大学、という目標がすでに設定されています。きわめて優秀な学生集団とスタッフ、充実した教育研究施設ですが、本郷・駒場・柏の３キャンパスを連携機能させ、新たな東京大学を作り、世界に貢献することになります。科学や産業や社会の実情把握、教育研究システムの検討、そして制度とキャンパスのありようを描くという段階的設計思考が必要です。微力ながら濱田純一総長先生のリーダーシップのもと東京大学の将来を見据えながら毎日の仕事に取り組みます。ご支援ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

## 教養教育を再考する

本年度より、教養教育と進学振分け制度改革を担当する副学長を務めることになりました。教育学が専門ではありませんが、20年近く教養学部に籍を置き、カリキュラム改革などに関わってきたことで、この職掌を頂くことになったのだと思います。

「教養教育」と「進学振分け」は、我々が学生だった時代から、東京大学の学部教育を特徴づけるキーワードとして頻繁に耳にし、また口にしてきたものです。これまで、教養教育を主体とする「前期課程」と専門教育を主体とする「後期課程」を点数方式の「進学振分け」で繋ぐ教育システムを当たり前の前提として、それぞれの部局毎に多くの教育の取組みが実施されてきた長い歴史(?)がある訳ですが、その結果として構築された現在の学部教育が、学生一人ひとりから見たときに4年間の教育として有機的・効果的に繋がっているのか、今一度振り返ってみる必要があると考えています。

総合的な教育改革の流れの中で、10年先を見越した中期・長期的な視点から「教養教育とは何か」を再考すること、4年間を通した学部教育という立場から進学振分け制度の在り方を見直すことは、大袈裟に言えば、東京大学のこれからの学部教育の方向を左右する作業になると考えています。実験屋の性分で、現場で動くことをモットーとしておりますので、よろしくお願い申し上げます。

副学長

**永田 敬**

昭和52年3月 本学理学部化学科卒業
昭和57年3月 本学大学院理学系研究科博士課程修了 理学博士
平成4年11月 本学理学部助教授
平成5年4月 本学教養学部助教授
平成8年5月 岡崎国立共同研究機構分子科学研究所助教授
平成10年4月 本学大学院総合文化研究科教授
平成11年4月 本学総長補佐
平成23年4月 本学大学院総合文化研究科副研究科長
平成24年4月 本学評議員
平成25年4月 本学副学長
専門分野：クラスター物理化学、レーザー分光学
研究内容：
1) K. J. Breen, et al. "Bottom-Up View of Water Network-Mediated CO2 Reduction Using Cryogenic Cluster Ion Spectroscopy and Direct Dynamics Simulations (Feature Article)" Journal of Physical Chemistry A 116 (2012): 903-912.
2) R. Nakanishi, et al. "Hydrogen-Bond Network Transformation in Water-Cluster Anions Induced by the Complex Formation with Benzene." Journal of Physical Chemistry Letters 2012: 3571-3575.

## より良い東京大学入試を目指して

新年度より、入試企画担当の副学長に就任することになりました。東京大学の学部入試は、高等学校の教育を踏まえた良問が多く、高等学校、学生、父兄からも信頼され、入試の模範となってきています。しかしながら、大きく世界が動き、人材の国際化や多様化が求められる中で、大学の教育のありようも変わりつつあります。東京大学では、総長の言葉にある「タフな学生」を育てるための教育が実施されようとしています。

この新時代の東京大学教育に相応しい学生の獲得のために、東京大学はこれまでの一般入試（前期試験）に加え、新型推薦入試を導入することを決め、今年の3月に記者会見しました。私の役割は、この新型推薦入試を、各部局と協力しながら、さらには高等学校関係者などからの意見も聞いて、具体的に設計することです。すでに、様々な検討が始まっていますが、この半年である程度のたたき台ができるといいと考えています。

新型推薦入試は、他大学の推薦入試をそのまま真似ればできるものではないと思っています。東京大学に相応しい新型推薦入試を目指して、これから議論を進めていきたいと思っていますので、忌憚のないご意見や批判、さらには提案など頂きますようお願いいたします。

副学長

**福田 裕穂**

昭和52年3月 本学理学部生物学科卒業
昭和57年3月 本学大学院理学系研究科博士課程修了 理学博士
平成元年2月 東北大学大学院理学研究科助教授
平成7年10月 本学大学院理学系研究科教授
平成13年4月 本学総長補佐
平成19年4月 本学生命系教育支援ネットワーク長
平成21年4月 本学評議員・大学院理学系研究科副研究科長
平成25年4月 本学副学長
専門分野：植物生理学、特に植物のかたち作りの分子機構
研究内容：
1)Fukuda, "H.Signals that control plant vascular cell differentiation." Nature Rev. Mol. Cell Biol. 5(2004): 379-391.
2) Oda, Y. and Fukuda, H. "Initiation of cell wall pattern by a Rho- and microtubule-driven symmetry breaking." Science 337(2012): 1333-1336.

副学長

## 野城 智也

昭和55年3月 本学工学部建築学科卒業
昭和60年3月 本学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了
平成13年4月 生産技術研究所教授
平成21年4月 生産技術研究所長（~平成24年3月）
平成25年4月 本学副学長
専門分野：サステナブル建築
研究内容：
1) 野城智也『サービスプロバイダー　都市再生の新産業論』彰国社, 2003年.
2) 野城智也, 札野 順, 板倉周一郎, 大場恭子『実践のための技術倫理―責任あるコーポレート・ガバナンスのために』東大出版会, 2005年.

## ネットワークを育てます

TSCP 室長、建設エンジニアリングオフィス統括、初中高等教育連携を担当する副学長として着任いたしました。

TSCP（Todai Sustainable Campus Project）では、磯部前室長をはじめ関係者の皆様のご尽力で第一期（TSCP2012）の二酸化炭素ガスの排出削減目標を達成しました。今後のさらなる削減のためには、きめ細かくデータを集め、集計解析しつつ、各部局の教育研究の特性に即した施設の運用改善策を生みだし、定着させていかねばならないと考えています。

建設エンジニアリングオフィスは新設の組織です。学内外の専門家の能力を結集することによって、知の創造・誘発装置としての大学施設の機能強化や持続可能性向上に寄与していきたいと考えています。

初中高等教育連携については、小中高大教員や関係者が相互の意思疎通を高めていくことによって、「学びたくてわくわくしている学生」「自ら課題を定義して解き方を工夫していける学生」の数を増やしていくことが役目の一つであると考えています。

私が担当する職務に共通するのは、学内外の専門家・関係者のネットワークを組み上げ、育て、継続的・組織的な活動として根付かせていくことが大事であるということです。一緒に仕事をさせていただく方々の力を引き出し、人と知のネットワークを育てていくことが自分の役割であることを肝に銘じつつ、職務に取り組んでいきたいと思っておりますのでどうぞよろしくお願いします。

副理事

## 清水 秀久

昭和47年3月 本学経済学部卒業
昭和47年4月 日本不動産銀行（現あおぞら銀行）
昭和51年4月 大蔵省転籍出向
平成11年6月 日本債券信用銀行　執行役員大阪支店長
平成12年6月 株式会社フィナンシャルブレイン太田昭和代表取締役社長
平成13年5月 株式会社九段インシュアランスサービス代表取締役社長
平成22年10月 本学渉外本部特任専門員
平成24年4月 本学渉外本部本部長

## 寄附は川、基金はダム

4 月 1 日付で副理事に就任いたしました清水秀久です。

縁あって 2010 年秋から渉外本部での寄附募集活動に携わることとなり、2012 年度から渉外本部長を拝命しております。

法人化した東京大学が、国際的な大学間競争を勝ち抜いてゆく強い財務基盤を築くため、2004 年秋に設けられた「東京大学基金」も 8 年半を経過しました。

この間「東京大学基金」に寄せられた寄附収入は約 280 億円となり、このうち約 190 億円が支出され、残りの 90 億円程が基金に留り運用されております。

水の流れにたとえれば、基金への寄附収入、支出が川の流れであり、基金に留る運用資金がダムの役割になろうかと思います。

東大 130 周年キャンペーンが終了し、2008 年のリーマンショック後の経済状況の低迷も加わり、ここ数年東京大学基金の川の流れは年々細くなり、ダムの水位上昇も遅々たるものとなっております。

基金設立 10 周年に当たる 2014 年に向け、この川の流れを再び太くし、ダムの水位上昇のピッチを速めることが渉外本部の役割と認識し、努力してまいりたいと思います。

今後とも皆様のご指導ご協力をよろしくお願い致します。

# 退任の挨拶

このたび退任された理事・副学長、副学長、副理事の退任に当たっての挨拶を以下のとおり掲載します。

## 理事退任にあたって

前理事・副学長　**清水 孝雄**

濱田純一総長の重視する「セカンドトリメスター」の時期に理事・副学長を仰せつかり、「秋入学」という言葉に象徴される教育の大胆な改革事業に携わってきました。少子高齢化や経済危機を初めとする様々な人類の課題に直面し、否応なくグローバル化する社会で、東大はその存在感を高め、高い公共心と能力（学力＋α）を持った学生を輩出する必要があります。そのためには、既成の考えに捕らわれない、新しい意識と仕組みが必要との提案は、当然のことながら大きな学内議論を引き起こしました。同時に他大学や政府、経済界、教育委員会などへの働きかけや対話を続けてきました。目の回る様な2年間でしたが、晴れやかな気持で、かつ健康に恵まれ任期を終えることが出来るのは多くの役員、教職員の皆さまの支えがあったからです。特に、「基本問題検討会議企画調整部会」や、「学術企画WG」の若き獅子たちの改革への情熱や知恵に触れることが出来たのは、貴重な体験でした。思えば、教育の在り方を真剣に議論したのは、60年代のストライキ後に医学教育の在り方を問うた時代以来かもしれません。東大は恐竜の様な巨大な存在です。環境の大きな変化の中で死滅の道を歩むか、あるいは進化して「世界の東京大学」（東京大学憲章）になるかは、次の世代の知恵と決断にかかっているでしょう。4月からは国立国際医療研究センターに場所を変え、医学研究に戻りますが、東大の応援は今後も続けたいと思います。

## 情理を尽くし

前理事・副学長　**武藤 芳照**

理事就任の挨拶で、(1) 東京大学の主役である学生のために、教職協働の形で、諸事業・活動を推進したいこと、(2) コンプライアンス、危機管理等、重要かつ困難な担当業務が数多くあるが、筋を通しつつそれぞれに関わる人々の気持ちを大切にして、「情理を尽くす」基本姿勢で重責を果たしたいこと、(3) 時の重みに耐えられる成果を一つでも残せるよう努力することを述べました。

2年の任期を終えて、必ずしも十分ではないにしても、相応の足跡を残すことができたものと、安堵しています。

この間、濱田総長はじめ、役員、各部局長、事務（部）長、そして各課係の職員の皆さんに支えられ、何とか職責を全うすることができました。

とりわけ、東日本大震災後の被災地への本格的・組織的ボランティア支援事業と体験活動プログラムの立ち上げは、東京大学135年余りの歴史の中で初めてのものであり、皆で地道な作業を積み重ね、一つの形を成すことができたのは大いなる喜びでした。「東大生や東大教職員が大好きになりました。皆様チャーミングで素晴らしい方々ばかりですね！」のボランティア隊参加者の感想は、忘れられない言葉になりました。

今後も、総長顧問の一人として、学生に関わるボランティア派遣と体験活動そしてスポーツ等について、学外から、いささかなりとお役に立てれば幸いです。

ご支援、ご協力下さったすべての方々に改めて御礼を申し上げ、退任の挨拶と致します。

## 副学長退任のご挨拶

前副学長　石井 洋二郎

2012年4月1日から「教養教育」担当の副学長を務めて参りましたが、2013年2月16日をもって大学院総合文化研究科長・教養学部長に就任したため、同年2月15日付で副学長を退任いたしました。わずか10か月半という短い期間でしたが、東京大学の中枢部で仕事をさせていただいたことは、私にとって大変貴重な経験でした。この間いろいろとご指導いただきました総長・役員各位をはじめ、関係の教職員の皆様方に、あらためて御礼申し上げます。

任期中は、「教養教育の再構築」をテーマとして、総長に対する直接の提言をはじめ、経営評議会、総長と研究科長の懇談会、総長補佐会等において、何度か問題提起をおこなってきました。これらの機会を通じて私が主張してきたのは、東京大学における教養教育は駒場における「前期課程教育」において完結するものではなく、後期課程においても、さらには大学院においても継続されるべきものであるということ、したがって全学的に取り組むべき課題であるということです。また、これと不可分の問題として、現行の進学振分け方式の改革も必須であることを訴えて参りました。

これらのテーマは、現在進行しつつある「総合的な教育改革」の中でも重要な位置を占めています。今後は立場を変えて山積する諸課題に取り組む所存ですので、引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

## 退任のご挨拶

前副学長　西村 幸夫

平成24年度末をもって副学長を退任いたしました。2年の間、全学の皆様からいただいた多大なご協力ご支援に感謝申し上げます。

全学のキャンパス計画を推進する立場として、この2年間はこれまで計画が温められてきたものが一挙に動き出した感のある時期でした。本郷地区では安田講堂の耐震改修が始まり、総合図書館前の噴水広場の地下に造られるアカデミックコモンズが動き出したほか、病院地区では病棟II期およびクリニカル・リサーチセンターの建物群の建設が始まりました。柏地区に新たに取得した北部隣接地への生産技術研究所千葉実験所の移転計画も着実に進んでいます。しばらくはキャンパス内が建設資材の運搬等でさわがしくなりますが、時代により適合したキャンパスの実現のためにご寛恕をお願いしたいと思います。

平成25年度より先端科学技術研究センターの所長に就きますが、しばらくはキャンパス計画室長の仕事も継続する予定です。今後ともよろしくお願いいたします。

## 退任にあたって

前副理事　尾越 和博

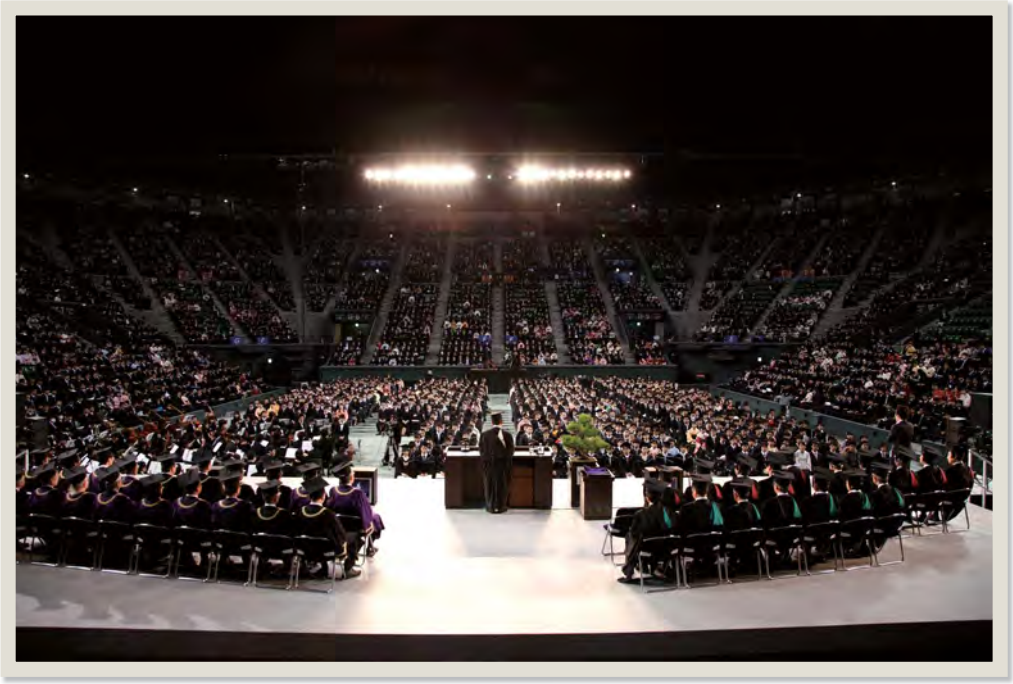
業務改善・改革を担当して4年、教職員の皆様のご協力とご支援を賜り、業務改革総長賞の実施と業務の見える化と標準化を目指して取り組んでまいりました。

業務改革総長賞は、毎年職員が自ら考え実施した課題を評価し総長が表彰する制度ですが、毎年教職員に向け総長からのメッセージが直接届くとてもよい制度だと思っています。改善・改革は止めてはいけません。常に次の課題に向かうという慣習を職員は持つ必要があると思います。

業務の見える化と標準化については、西成活裕教授のご指導のもと工学系・情報理工学系等事務部の協力をえて「無駄とり」を実施しました。その経験を生かし平成23年度に業務改革推進室の下に三つのWGを設置し、総長が「森を動かす」の中で表明されている「スリムな組織、スマートな運営、スピーディな業務」の実現を目指し、具体的に目標を立て検討を行ってきました。この課題を実現するにはまだ少し時間がかかりますが、教職員が自ら考え自らの力で将来の業務運営の礎を築きあげていくものだと思っております。そのためには、円滑なコミュニケーションが必要不可欠だと感じています。教職員相互間の円滑なコミュニケーションは、迅速な意思決定や問題解決につながり、スピーディな業務運営につながるはずです。

「行動シナリオ」の実現に向け更なる業務改善・改革を推進し、組織と業務のスリム化が実現することを期待しています。

# 平成24年度卒業式



平成24年度卒業式が、3月26日（火）に、有明コロシアムにおいて挙行された。

これまでは、卒業生は安田講堂、ご家族は御殿下記念館を会場として行われていたが、今年度は文系理系を問わず、学部を卒業するすべての卒業生及びご家族が一堂に集い行われた。式は、10時に開式し、約2,400名の卒業生（卒業者数3,090名）が出席した。

開式に先立ち、音楽部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」の演奏があった後、総長をはじめ、理事・副学長、理事、各学部の学部長及びご来賓（各学部の同窓会等代表者）の方々がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、ご来賓の紹介があった後、開式となった。

はじめに、濱田総長から、各学部卒業生代表に、順次、学位記が授与された。

続いて、濱田総長から卒業生に向けた告辞が述べられた後、卒業生総代（農学部 樋渡公愛さん）から答辞が述べられた。

その後、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる東京大学の歌「大空と」の合唱、出席者全員による同じく東京大学の歌である「ただ一つ」の斉唱をもって式を終了した。

なお、本式典では、壇上においての手話通訳及びモニターでの式典模様（手話通訳の映像と字幕も表示）の放映を行い、ご家族など約2,700名が出席した。

## 平成24年度卒業式 総長告辞

東京大学総長
濱田 純一

皆さん、ご卒業おめでとうございます。東京大学の教員と職員を代表して、お祝いを申し上げます。また、この晴れの日をともにお迎えになっていらっしゃるご家族の皆様にも本日は多数ご参列いただいており、心よりお祝いを申し上げたいと思います。

このたび学部を卒業する学生の数は、合計で3,090名になります。うち留学生は51名です。

これまでの通例では、卒業証書の授与の式典は、本郷の安田講堂において2回に分けて行われてきました。今年は、安田講堂の耐震改修工事のために、この有明コロシアムで執り行うことになりましたが、結果としてこの式典は、文系理系を問わず、学部を卒業するすべての皆さんが一堂に集うことのできる、貴重な機会となりました。会場の収容数が大

きいために、ご家族の皆様にもこの式典の場にご同席いただけることになり、嬉しく思います。いま、このようにして学部を卒業していく多くの皆さんを見ると、これからの日本の社会、あるいは世界の国々の未来を担っていくであろう若い力の熱気をひしひしと感じます。

振り返ってみれば、おそらくは、あっと言う間の大学生活だった気がするのではないかと思いますが、この期間に、皆さんの知的な力は、間違いなく大きく成長したはずです。知識の量が増えたというだけでなく、知識の質も変わったはずです。また、多くの友人を得たり、さまざまな社会経験をしたりと、日々の生活の幅も随分と広がったことでしょう。皆さんの在学中にはさまざまな出来ごとがあったでしょうが、そのうちのもっとも大きな事柄の一つが東日本大震災であったことは、間違いないと思います。あの大震災から２年あまりが経ったものの被災地の復興はまだなお途上にありますが、この間に、少なからぬ数の学生の皆さんが、教員や職員とともに救援活動や復興支援活動に参加してくれたのも、私の記憶に強く残っているところです。皆さんは、日々勉学を重ねてきたことによる学問的な成長にくわえて、こうした大きな社会的出来ごとの中で真剣に考え、あるいは行動することを通じて、社会的な成長をも遂げてきたことと思います。今日、そのような過程を経て卒業の日を迎えている皆さんの姿を見ると、まことに頼もしく感じます。

実は、私はこの3月で、総長としての6年任期のうちの4年間が過ぎることになります。つまり、皆さんのうち4年間で卒業する人たちは、私が総長に就任してすぐの時期に日本武道館で催された入学式での式辞を聞いていたはずの人たちです。その式辞の中で私は、新入生の皆さんに、「タフな東大生」になってほしい、というメッセージを伝えました。それ以降、私は繰り返し学生の皆さんに、そのメッセージを出し続け、またそのように皆さんが成長できるような教育環境を整えるための取り組みを行ってきました。皆さん、いま自分自身を振り返ってみて、大学で過ごしている間に「よりタフに」なった、と感じているでしょうか。

「タフ」という言葉には、いろいろな意味合いがあります。4年前に式辞の中でこの言葉に触れた時には、皆さんが大学での勉学を通じて磨き上げる知的な力を、実際に社会で存分に発揮していくために、「社会的なコミュニケーションの場におけるたくましさ」、そして、そのたくましさを裏付ける人間的な力をも鍛えてほしいという話をしました。その後、何度も「タフさ」について話をしたり議論をしたりする機会があり、また学生の皆さんから「『タフ』ってどういうことですか？」と聞かれることもあったのですが、それに対して、「タフとは何かを考え続けることこそがタフになる道だ」と、禅問答のようなやりとりをしていたことも思い出します。

皆さんに求められるタフさというものを考えると、大学において皆さんが何より鍛えられてきたのは、学問という知的な作業に取り組んでいく上でのタフさだったはずです。大学での勉学で扱われるテーマは、高校までの勉強の延長上ではないものが数多くありますし、またよく言われるように、必ずしも一義的な正解のない問題も少なくありません。そうした課題に対してさまざまな角度から思考を重ねてみる、また概念と論理をぎりぎりまで積み上げてみる、あるいは、なかなか成功しない実験や観察を新たな工夫をくわえながら繰り返し続けていくといった経験を、皆さんはしてきたはずです。また、必ずしも授業や単位とは関係なくても、自分で関心を持った課題や分野に挑戦してみようという主体的な姿勢に目覚めた皆さんもたくさんいると思います。さらには、挑戦という言葉では語り尽くせないような、自らの中に沈潜して知的な思考を深く続けていく精神の緊張の厳しさや、あるいはひょっとして、そうした緊張の心地良さを味わった皆さんも、少なからずいることと思います。こうした多彩な経験を通じて、皆さんは大学で、ただ多くの知識を得たというにとどまらず、知的な事柄に取り組む作法とタフさを身につけて、いまここに、卒業の時を迎えています。

こうした知的なタフさにくわえて、私は皆さんに、社会的なタフさというものも培ってほしいという願いを持ちました。それが、さきほど触れた、「社会的なコミュニケーションの場におけるたくましさ」ということです。ただ、「たくましさ」というと、それは、自分の意見や考え方を何が何でも押し通そうとする強さのようにも感じられるかもしれませんが、そうではありません。「コミュニケーション」というのは当然に、一方向ではなく双方向であってこそ成り立つものです。自分の考えや論理を正確に表現し、伝えるとともに、相手が何を考え、何を伝えようとしているのかを理解しようとする努力なくしては、コミュニケーションは成り立ちません。たしかに、そうした双方向のやり取りというのは、ただ一方的に何かを伝えることと違って、なかなか手間ひまのかかるものです。けれども、大学において、例えば試験で答案を書くといったことや一人で論文を仕上げるといったこととはまた違って、社会においては、そうした双方向の面倒なプロセスを通してこそ皆さんの知的な力を具体的な形にしていくことが出来ます。そこでは、アクティブな表現力が必要になることもあれば、相手を受け止める理解力や寛容さ、あるいは、場合によっては他人の悲しみや痛みをも背負い込みながら問題解決の道を求めていくような力さえ求められることもあります。このようなことを考えるとき、私は、結局のところ、何事であれ物事を正面から受け止め、それに粘り強く向き合っていくという、きわめて素朴な事柄が、タフさの本質的な部分であるように感じます。

社会で求められるこうした力の大切さを、この４月から就職する皆さんはすぐに実感することと思います。また大学院にすすむ皆さんにしても、学部の時代以上に社会的な付き合いの場面が広がり、やはり、こうしたタフさの必要性をこれまでにも増して感じるようになるでしょう。

最近、皆さんが少なからず耳にする言葉の中に、多様性という言葉、そしてグローバル化という言葉が含まれているはずだろうと思います。そうした言葉が広く用いられている状況は、タフさというものが、この時代にますます重要になっていることを意味するものと、私は理解しています。

多様性というのは素晴らしい言葉ですが、同時に恐ろしい言葉でもあります。多様性は個々の人や生物、事物の特性が生かされる状態ですが、社会というものが構成される限りは、それらの個性が互いに触れ合わないわけにはいきません。そうした個性の触れ合いが、お互いを擦り減らし合うのではなく、むしろ相互に強め合いプラスになっていくための触媒の役割をするのが、先ほどお話ししたような意味でのタフさであろうと思います。

グローバル化についても同じことが言えます。グローバル化というのは、現代における多様性の重要な部分を占めています。今日盛んに言われているグローバル化の意味というのは、ただ英語などの外国語でコミュニケーションが出来るということだけでなく、自分とは違った価値観や考え方、異なった習慣や生活スタイルをもった人々と交わることを通じて、自分の力を高めていくことにあります。そうした建設的な交わりを生み出すために必要なのが、タフさに他なりません。私はよく、学生の皆さんが「よりグローバルに」、「よりタフに」なるようにと、二つのフレーズをセットで繰り返してきましたが、タフさはグローバルな環境をよりよく生かすために必要なものであり、またグローバルな環境の中でよりよく鍛えられるものであると考えています。

タフ、ということについて、最後にもう一点、付け加えておきたいと思います。タフであるということは、皆さん一人一人にとっての力の源となると同時に、社会が皆さんに期待する役割から逃げないためにも、社会から期待されている責任を引き受けるためにも、必要な資質です。皆さんの多くはおそらく、大学に入学した時に、将来は社会に役立つことをしたいと考えていただろうと思います。実際、大学の設立の趣旨からしても、また運営財源の少なからぬ部分が国民の税金によって賄われていることからしても、東京大学で学んで卒業していく皆さんには、さまざまな形で社会に貢献していくことが強く期待され

ています。そうした期待に正面から応えようとする時に、高い水準の知的な力を備えることにくわえてタフであるということは、皆さんの大いなる武器となるはずです。

さて、皆さんの多くは、これからおそらく40年以上にわたって、社会のさまざまな場で仕事を続けることになると思います。40年先というのは、社会予測ではいろいろなことが言われていますが、実感としてはなかなか想像できないほど先の時間です。

私もいまの皆さんと同じように大学を卒業した時から、ほぼ40年が経ったのですが、卒業当時は、今あるような時代の姿はとても想像していませんでした。私の大学時代は、ちょうど大学紛争の真最中でした。そこでは伝統的な学問の権威が問い直されていましたし、また大学の外でも活発な労働運動が展開されるなど社会が大変騒がしい時期でした。東西の冷戦がまだ厳しく、ベトナム戦争が続いていた時代です。その時期の日本は、同時に、経済的に見ればなお戦後の高度経済成長が続いていた時代でした。しかし、その後、オイルショックを経て高度経済成長から安定成長の時代に移り、1990年代に入るといわゆるバブルの崩壊を迎えます。この間、1989年、ちょうど皆さんの多くが生まれるか生まれないかという頃の時期ですが、その年にはベルリンの壁が崩壊し、東西の冷戦時代は終わりを告げました。

皆さんのご家族の方々の多くも、こうした時代を経験してこられたことと思いますが、このように40年というのは、いま皆さんがとても想像できないような大きな変化が起きるのに十分な時間です。そうしたことを考えると、卒業していこうとする皆さんに希望するのは、これからの人生を、目先のことだけに一喜一憂したり周囲に振り回されたりするのではなく、自分の頭で考え自分の判断を信じて、大きな視野を持ちながら泰然と送ってもらいたいということです。時代のいかなる変化にもかかわらず、そのように生きることが出来、また社会からの期待に変わらず応えていくことが出来るように、皆さんの知的な力を、そしてタフな力を、東京大学は育てようとしてきたつもりです。

幸いにして、皆さんは一人ではありません。卒業後も大学と、あるいは卒業生同士で、さまざまなネットワークが生かされていくことと思います。東京大学が、卒業生の間のネットワークづくりや卒業生と大学とのより密接な関係づくりに力を注いできていることは、皆さんもある程度はご存じだろうと思います。そうした大学の姿勢に応えて、近年、同窓会の活動は日々活発なものとなってきており、大学と連携もしながら多彩なイベントも催されています。毎年秋に開催されるホームカミングデイはその代表的なものであり、このたび大学を卒業していく皆さんにもぜひ数多く参加いただきたいと願っています。留学生の皆さんの母国でも、卒業生の同窓会組織が出来ているところがあります。私もここ数年、海外の同窓会も含め各地の同窓会訪問を続けていますが、そうした場で、それぞれの地域のリーダーとして活躍している卒業生の皆さんの姿を見るのは、とても嬉しいことです。

今日は、これまでの皆さんとの別れの時であると同時に、これからの皆さんと出会う最初のきっかけとなる日です。さらに大きく成長した皆さんと再びお会いすることを楽しみにしながら、私の告辞を終えたいと思います。皆さんのこれからのご活躍を、心からお祈りしています。

〈平成二十五年(2013年)三月二十六日〉

---

## 答辞

卒業生総代　農学部　　樋渡公愛

本日は私達卒業生のためにこのような盛大な式典を催していただき、誠にありがとうございます。ご多忙にもかかわらずご臨席を賜りました濱田総長を始めとする出席者の方々に、卒業生一同心より御礼申し上げます。

振り返ると、私たちが大学で学んだ4年間は日本、そして世界的に見ても激動の4年間

でした。リーマンショックとそれに続く世界的経済危機の直後に入学し、2年生の時には東日本大震災と福島原子力発電所の事故が発生しました。また二度の政権交代もありました。このような時流にあって、一人ひとりが社会との関わり方、自らの在り方を問いかけ、苦悩し、探求した4年間であったと思います。

私は入学と同時に運動会の剣道部に入部しました。学生が主体となって部を運営する中には、多くの部員の価値観の共有、目標の統一、意思の疎通といった難題が常に存在しました。時には仲間とも激しくぶつかり合い、理解し合えぬやるせなさと自らの力の無力さに涙しました。しかし困難の中で自ら道を選択し、周囲の大勢から影響を受ける中で、他の誰とも違う自己を確立していくことに、精神的な充足を感じました。そして、チームをまとめる立場となった最終学年に全員一丸となって最後の試合に勝利した瞬間は、感動に打ち震えました。このような時間は、これから一社会人または一研究者として歩みだす者にとって、いわば最後の青春であったと感じています。

また農学部では、水産学を専攻しました。水産業は、再生可能な生物資源としての魚介類を人間が利用する産業ですが、天然の野生資源を対象とすることから、その生産性は自ずと自然の再生速度に制限されます。それゆえ、その将来のあり方を考えるにあたっては、自然と人間との関わり方について正面から向き合い、如何にすれば自然の恩恵を将来にわたり持続的に享受し続けていくことかできるかを真摯に考えていくべき宿命を背負った産業であると言えます。したがって、数ある産業の中でも、我々の住むこの宇宙船地球号の中で我々人類は今後どのように持続可能な社会を構築していくべきかを考える上で、非常に示唆に富んでいる産業であると思いました。それに関連するさまざまなことを学ぶ中で、現状に対する深い危機感と、自分が社会に貢献しなくてはという強い義務感が芽生えました。

世界では今、地球温暖化を始めとする環境問題、エネルギー問題、食糧問題といった問題が山積みとなっています。日本を見ても法律、経済、金融、工業、農林水産業、福祉、医療といった多くの分野でひずみが生じており、今までの社会規範を持続させるだけでは不十分で、これから変化を迫られる時代になるということは明白です。私が大学で学んだ中に、生物学の分野で「赤の女王仮説」というものがありました。これはルイス・キャロル著『鏡の国のアリス』に出てくる言葉、「その場に留まるためには走り続けなければならない」ということにちなんで、「種が生き延びるためには進化し続けなくてはいけない」ということを表した説ですが、私はもっと拡大して、「我が国が、そして人類が生き残って行くためには進歩し続けなくてはいけない」というように捉えております。留まるところを知らない世界の流れの中で、常により良い状態を目指して思考し、進歩し続ける姿勢が必要となっています。その中にあって、東京大学という恵まれた環境で知識を深めた私達は、社会の先頭に立ち、困難をたくましく乗り越え、学んだ成果を社会に還元することこそ責務と考えます。その力もあるはずです。これまでの成功体験は自信とし、失敗は教訓として学び、今後の糧にしていきます。もちろん、どうしようもない壁にぶち当たって挫けることもあるでしょう。何かを簡単に変えられるとも思っていません。それでも、未来に対して決して悲観的にならず、楽観的にもならず、謙虚に、しかし情熱的に進んで行くという決意を、この卒業にあたって表明いたします。

最後に、ここまで私達を成長させてくれた先生方、職員の方々、今まで関わって来た全ての方々、そして何より見守ってくれた家族に感謝の意を表します。そして東京大学の輝かしい発展を心から祈念いたしまして、答辞とさせていただきます。

# 平成24年度学位記授与式

平成24年度学位記授与式が、3月25日（月）に、有明コロシアムにおいて挙行された。

これまでは、修了生は安田講堂、ご家族は御殿下記念館を会場として行われていたが、今年は文系理系を問わず、大学院を修了するすべての修了生及びご家族が一堂に集い行われた。式は、10時に開式し、約2,400名の修了生（修了者数3,997名〈修士課程2,765名、博士課程891名、専門職学位課程341名〉）が出席した。

開式に先立ち、音楽部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」の演奏があった後、総長をはじめ、理事・副学長、理事、各研究科長及び各研究所長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となった。

はじめに、濱田総長から各研究科・課程の修了生代表に、順次、学位記が授与された。

続いて、濱田総長から修了生に向けた告辞が述べられた後、修了生総代（新領域創成科学研究科博士課程 長山大介さん）から答辞が述べられた。

その後、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる東京大学の歌「大空と」の合唱、出席者全員による同じく東京大学の歌である「ただ一つ」の斉唱をもって式を終了した。

なお、本式典では、壇上においての手話通訳及びモニターでの式典模様（手話通訳の映像と字幕も表示）の放映を行い、ご家族など約2,700名が出席した。

東京大学総長
**濱田 純一**

## 平成24年度学位記授与式 総長告辞

本日ここに、晴れて学位記を授与される皆さん、おめでとうございます。東京大学の教員と職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。また、この日に至るまで、皆さんを支えてきて下さったご家族の皆さまにも、感謝の思いとともにお祝いの気持ちをお伝えしたいと思います。

このたび大学院を修了する学生の数は合計で3,997名です。そのうち留学生は461名で、全体の1割あまりの皆さんということになります。修了者数合計の内訳は、修士課程2,765名、博士課程891名、専門職学位課程341名です。これまでの通例では、学位記授与の式典は、本郷の安田講堂において2回に分けて行われてきました。今年は、安田講堂

の耐震改修工事のために、この有明コロシアムで執り行うことになりましたが、結果としてこの式典は、文系理系を問わず、大学院を修了するすべての皆さんが一堂に集う、きわめて希な機会となりました。ご家族の皆様も別会場ではなく同じ場にご参加いただいています。このようにこの場に集った皆さんを見ると、改めて、これからの日本や世界の学術を、そして社会を、先頭に立って担っていくであろう、力強い熱気をひしひしと感じます。

これまで、皆さんは、大学院で研究を進める中で、学部での幅広い勉強や経験とはまた違った形で、より主体的・能動的に考察の対象を絞り込んで掘り下げながら、能力を磨いてきたことと思います。そのことによって、皆さんの中には、ある特定の分野においては、研究の仲間たちはもちろん、指導教員の知識さえも超える水準の成果を達成した人も少なくないはずです。つい先日も、東京大学総長賞という学生表彰が行われましたが、そこで、大学院の皆さんの優れた研究成果を垣間見ることができ、まことに嬉しく、また誇らしく感じました。表彰を受けた研究成果はもちろんですが、表彰までには至らなかった研究も含めて、実に幅広い学問分野にわたって皆さんが卓越した成果を生み出していることに、深い感動を覚えました。

皆さんのこれからの進路はさまざまでしょう。学位記を受け取り、すぐに社会で活躍しようとする人もいれば、引き続き大学の中で、さらに専門的な研究を深めていこうとする人もいます。これまでの研究を通じて自分の能力の大きな可能性を確認したはずの皆さんには、それが企業など社会の場であれ、あるいは大学の中、研究室の中であれ、自信をもって自らの力を発揮し、またさらに鍛えていってもらいたいと思います。

そうした皆さんに私が期待したいのは、日々の仕事や研究を通じて社会や学術に対する具体的な貢献を行う中で、「時代の精神」というテーマを意識してもらいたいということ、またその形成に与るという意識を持ち続けてもらいたいということです。

いまの日本社会については、将来の見通しの不透明さがしばしば語られます。また、日本に限らず、世界の国々がそれぞれに、予測や取り組みの難しい数多くの課題を抱えています。こうした不透明さの背景として、金融危機や国際社会におけるパワーバランスの変化、地球温暖化やエネルギー問題、食糧問題、少子高齢化の問題など、皆さんもおそらく多くの要因に思いあたることと思います。また、こうした不透明さ、そしてそれと結びついた漠たる不安感の存在には、それぞれの課題を規定している要素の多様さや複雑さ、さらに関連する情報の膨大さやスピードが、拍車をかけているように感じます。いずれにしても、こうした構造の下では、何か一つの手段や方法をとれば、それで課題がすぐに解決するという状況は想定しにくくなり、複数のさまざまな手段を組み合わせ、また手段や方法をたえず修正し続けるといった、粘り強い取り組みが求められるでしょう。そして、さまざまな専門分野が互いに連携し協調し合うことがますます不可欠のこととなるはずです。

このような取り組みにおいては、何よりまずは目に見える具体的な成果が期待されます。とくに今日の社会では、科学技術の発展に対する期待の大きさには格別のものがあります。科学技術立国といった言葉は、すでにかなり以前から用いられてきた言葉ですが、近年の日本の活力再生を目指す議論の中で、改めて真剣味をもって語られるようになっています。今日、この場では、多くの留学生の皆さんも修了の日を迎えていますが、皆さんの国でも、科学技術に対する期待には格別のものがあるはずです。そして、そうした期待の強さは、「イノベーション」という、最近よく使われる言葉にも象徴されているように感じます。科学技術の発展は常にイノベーションの積み重ねであるはずなのですが、あえてことさらに「イノベーション」という言葉が強調されるのは、これまでの延長線上での発展だけではなく、一段の飛躍となる技術開発が期待されているということです。そうした大きな変化が学問研究にも求められている時代です。

言うまでもなく、時代の課題に応え、これからの新しい社会作りにかかわるのは科学技

術だけではありません。制度や経済、あるいは教育や文化などのあり方といったことも、重要なテーマです。実際、この間の金融危機の中では、金融や経済システムのあり方が大きな論争の的になり、資本主義そのものを見直そうという議論も出てきました。また、日本の国内の法制度に目を向けても、120年ぶりに民法を大改正しようという取り組みがすすんでいますし、あるいは憲法という国の大本にかかわる法の改正論議もはじまろうとしています。ここでも、これまでの制度の仕組みが根本から問われるような大きな変化の可能性がうかがわれ、そこにさまざまな人文科学や社会科学がかかわる役割には少なからざるものがあります。そして、科学技術にせよ、社会のさまざまな制度やシステムにせよ、それらの大きな変化を促していくのは、個々の知識や知恵や工夫であるとともに、「時代の精神」であると、私は感じています。

「時代の精神」という言葉を用いると、あるいはドイツ哲学の系譜の中で、精神文化の発展段階論的な議論の中で使われてきた用語法を思い起こす人もいるかもしれません。ここでは、それほどの深い意味はなく、ごく一般的な用法として、ある時代を構成するさまざまな要素―それは、政治であり、経済であり、社会の組織・構造であり、文化であり、人びとの日々の生き様であるわけですが―、そうした諸要素全般を規定するような影響を及ぼす精神思潮、といったものを意味しています。日本の近代史の上でも、欧米へのキャッチ・アップが時代の精神であったこともあれば、国家主義が、民主主義が、あるいは経済的な豊かさが、時代の精神であった時期もあります。

ここであえて「時代の精神」という言葉を用いたのは、皆さんがこれから個々の分野で力を発揮し、技術や制度といった社会の外形を作っていくにあたって、その外形に大きな変化を生み出していくその背景に存在するかもしれない社会的な流れは何か、ということをも意識してほしいと思うからです。皆さんが大学の中で培ってきた能力は幅広く豊かなものであるはずですから、その力を、次の社会を形成する、いわば要素技術の創出だけにとどまらず、その要素技術を生み出し、それらに力を与えていく背景となる社会の無定形なものへの洞察にまで、発揮してもらいたいと思うのです。

こうした時代の精神ということに私が言及するのは、さらにまたいまの日本社会において、あるいは世界の多くの国々において、さまざまな課題を克服しようと取り組みがなされていく時に、個々の具体的な技術開発や制度形成だけでは、人びとになお落ち着かない感覚が残るように感じるからでもあります。今日のように複雑で大きな変化が起きている時代には、目前で個々の取り組みがなされているようであっても、そうした取り組みが時代の流れの中でどのような位置にあるのかを直感できなければ、漠たる不安が残るのが人間という存在であろうと思います。課題への個々の取り組みが、時代の精神とマッチしていることを感得して初めて、人は安心できるように思います。

私がこうした思いを漠然ともっていたところでたまたま接したのが、本学の工学系研究科で建築学を担当している隈研吾教授の「小さな建築」という話です。隈教授は、「強く合理的で大きな」建築に対して「小さな建築」ということを提唱しています。そこで「小さな建築」の例として挙げられているのは、小さな材料単位であり、「もたれかかる」技術であり、「木を織る」という発想です。詳しいことは、関心があれば、隈教授の本を読んでいただくとよいのですが、教授は、歴史上で「大きな災害が建築の世界を転換させてきた」と語りながら、一昨年の東日本大震災の経験から、「強く合理的で大きな」ものの限界を感じて、自立的な「小さな建築」に興味が移っていった、と述べています。その著書の一節を引かせていただきますと、「いまや世界は大きなものから小さなものへと流れはじめている。人間という生物が、自分一人の手を使って世界と対峙しようとしている、大きなシステム（たとえば原発）を受け止めるだけの受動的存在から、自ら巣を作り、自らエネルギーを手に入れる能動的な存在へと変

身を遂げつつある」、と記されています。

つまり、ここに述べられている「大きなものから小さなものへ」というのが、時代の精神ということです。こうした「小さなもの」へのシンパシーの感覚は、たしかに東日本大震災の後に、少なからぬ人びとによっても共有されていたものです。つまり、それは、教授個人の思想にとどまらず、時代の精神という意味合いを持っていたということになります。

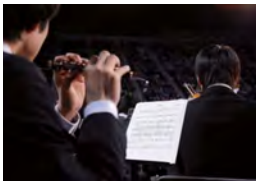
こうした捉え方に対しては、おそらくいろいろな意見があるだろうと思いますが、ここでのポイントは、それに同意するかしないかではなく、この例に見られるように、時代の精神思潮を意識してこそ、自分たちが日々行っている活動—隈教授の場合は、それが建築ということになるのですが—、そうした活動の位置や意味が見えてくる、そして、たんに瞬間的な満足感や論理的な納得とはまた異なった次元の安心感や達成感が生まれるであろうし、さらに、そうした意味づけがまた、新しい取り組みを生み出す後押しもするだろうということです。ある技術にしても、ある制度でもシステムでもよいのですが、それ自体としての有用性、有効性だけでなく、それを越えて、さまざまな他の分野にも、さらには人々の生き方にさえも影響を及ぼしていく力を内在させている時に、それは時代の精神の発露としての色合いを帯びることになります。皆さんには、日々の仕事や研究においてそうしたものを意識するのみならず、その形成に与ることのできるだけの時代に対する洞察力と構想力が備わっているはずだと信じています。

いまの時代の大切な価値の一つとして、多様性ということがよく語られます。時代の精神というのは、それに反する感覚のように思われるかもしれません。しかし、私たちは、多様性という価値を語るだけで、そこで思考停止をしていなかったか、その先にあるもの、あるべきものまで踏み込んで見つめようとしなかったのではないか、と考えてみる必要もあります。また、時代の精神というのは、決して永遠不変のものではなく、その変化を促していくものこそが多様性の存在だろうとも思います。

同様の意味において、学術というものは、本来的にまさしく時代の精神の揺りかごとなるものです。時代の精神をつねに新たに生まれ変わらせていくものこそ、学術のもっている豊かさです。学術は、その内容において時代の精神に影響を与えるだけでなく、好奇心に充ち溢れた知的な試行錯誤が許容される自由闊達さ、あるいは事物や論理の新たな発見に感動できる精神的な豊かさといったものに象徴される学術のスタイルそのものが、いつの時代においても、その折々の時代の精神の基盤を構成する不易の要素であっても不思議ではないように思います。

変化のまことに激しい時代ですが、それだけに、東京大学という場で学術というものに本格的に携わる経験をもった皆さんの知的な力の幅と豊かさが、新しい時代の技術や制度などといった外形を作るだけでなく、同時に時代の精神を直観し、あるいはそれを生み出すのに寄与することが期待される時代でもあります。大学院の課程を修了した皆さんの、これからの大いなる活躍をお祈りして、告辞を終えることとします。

〈平成二十五年(2013年)三月二十五日〉



# 答辞

修了生総代　新領域創成科学研究科博士課程
長山大介

本日は濱田総長を始めとする諸先生方のご臨席を賜り、このような盛大な学位授与式を催して下さいましたことに、修了生を代表いたしまして、篤く御礼申し上げます。また只今濱田総長より温かい激励のお言葉をいただきましたこと、幸甚の至りに存じます。重ねて、深く御礼申し上げます。

今からちょうど十年前、私は東京大学への入学を目前に、張り裂けんばかりに期待に胸を膨らませておりました。

日本で生まれて間もなく海外に移住した私は、高校卒業までの約18年間を海外で過ごし、そこでは日本人として誇らしい思いも、差別や誤解を受ける悔しい思いもしました。そんな私にとって、日本という国は広大な太平洋の反対側にありながらも、私の不可分な一部であり続けました。そしてこの原体験が、今日も抱き続ける「日本がいつまでも世界で尊敬される国であってほしい。そのために少しでも役に立ちたい」という念願へと昇華されていきました。

だからこそ、各界のリーダーを輩出し、日本の近現代史の屋台骨を支え、世界の知の最先端を切り拓いてきた東京大学は、燦然と輝く憧憬の的でした。その東京大学に入学をさせていただいた以上、自分の持てるだけの力を振り絞って、東京大学に、日本に、そして世界に貢献したい。この揺ぎ無い決意が私の人生の歯車に大きな動力を与え続けてくれました。

しかし、学友と比しても天賦の才に恵まれたとは言えない私の実際の研究生活は決して華々しい成果ばかりではありませんでした。「これはきっと新しい。これはきっと価値がある」と閃いたことのほとんどは、既に世界のどこかにいる他の誰かが思いついており、それを発見して愕然としたことが幾度となくありました。

しかし、修士課程から博士課程に進み、指導教員の先生に厳しさと優しさの両方を以ってご指導を賜り、挫折と修練と挑戦を繰り返すうちに、一つの思いが胸中に横溢してまいりました。

「これこそが、人類の叡智を研いで究める営み、即ち研究なのだ。世界中の賢人が切磋琢磨し、心血を注いで人類を前進させる営みに参加する以上、やすやすと成果が出るはずがない。ほんの少しでも新しいこと、ほんの少しでも価値があることを実現するためには弛まず励み、努めるしかないのだ」

すると、それまでが嘘のように心が軽くなり、研究に対する新たな意欲が沸々と湧き上がりました。志だけを持ち、徒手空拳で日本に帰国して十年。東京大学での日々を通じて学問の面白さと尊さに開眼し、そして本日、こうして念願の日を迎えることができました。

古より営々と進歩を続けてきた人類史の大海原の中で、一人の人間は一滴の雫に如かないかもしれません。しかし、その一滴は「意志を持った一滴」です。私達が初志を絶やさず、理想を抱き続け、明日が今日より少しでも良い日になるために懸命に生きる限り、その一滴が二滴となり、二滴が三滴となり、やがて流れになり、いつの日か大海原を大河に変え、人類をより良い未来へと運ぶ力になると信じています。

これまで御指導下さいました濱田総長をはじめとする諸先生方、教職員の皆様、先輩方やかけがえのない友人達、そして常に温かく見守り支え続けて下さった家族・親族の皆様に心の最も奥深くより御礼申し上げます。

皆様方のご多幸と東京大学のより一層の発展、そして日本と世界の幾久しい繁栄を祈念致しまして、答辞とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。

# 平成25年度入学式・大学院入学式

平成25年度学部入学式及び大学院入学式が4月12日（金）に、日本武道館において挙行された。午前の学部入学式には約3,100名の新入生と、そのご家族など約5,500名、合わせて約8,600名が、午後の大学院入学式には、約2,600名の新入生と、そのご家族など約4,200名、合わせて約6,800名が出席した。

午前9時45分、運動会応援部による演舞があり、音楽部管弦楽団によるレナード・バーンスタイン作曲の「キャンディード序曲」及びワーグナー作曲の「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、濱田純一総長はじめ理事・副学長、理事、学部長、研究科長、研究所長並びに来賓の黒川清本学名誉教授が登壇し、10時40分開式となった。

式では、はじめに音楽部管弦楽団、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる、東京大学の歌「大空と」の奏楽、合唱の後、総長が式辞を述べ、続いて、石井洋二郎教養学部長が式辞を述べた。式辞の後、黒川清本学名誉教授から祝辞をいただいた。その後、入学生総代垣脇宏俊さん（理科Ⅲ類）による宣誓が行われた。最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の奏楽、合唱をもって、12時に式を終えた。

大学院入学式においては、13時25分から運動会応援部による演舞、音楽部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、濱田純一総長はじめ理事・副学長、理事、研究科長、研究所長並びに来賓のRita Colwell（リタコルウェル）元全米科学財団長官が登壇し、14時20分開式となった。

式では、音楽部管弦楽団、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる、東京大学の歌「大空と」の奏楽、合唱の後、総長が式辞を述べ、続いて、坪井俊数理科学研究科長が式辞を述べた。式辞の後、Rita Colwell元全米科学財団長官から祝辞をいただいた。その後、入学生総代菅澤翔之助さん（経済学研究科）による宣誓が行われた。最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の奏楽、合唱をもって、15時40分に式を終えた。

東京大学総長
濱田 純一

# 平成25年度入学式 総長式辞

このたび晴れて東京大学に入学なさった皆さん、おめでとうございます。東京大学の教員と職員を代表してお祝いを申し上げます。

また、この日を心待ちになさっていたであろうご家族の皆さまにも、心よりお祝いを申し上げたいと思います。ご家族の皆さまは、この東京大学への入学を目指して全力を振り絞っているお子さんをしっかりと支えるべく、大きな力を注いでこられたことと思います。その過程では、嬉しいこともあれば、苦しいこと、あるいは、はらはらしながら見守ることもあったことでしょう。私自身の経験を振り返ってみても、ここにいる新入生の皆さんは、言葉には必ずしも出来ないにしても、ご家族の皆さまに対して深い感謝の思いをもっているはずです。今日これから、新入生の皆さんにどのような大学生活を送ってもらいたいかをお話ししますが、ご家族の皆さまにも、東京大学としての教育姿勢をご理解いただき、またご協力もいただければと思います。

今年の学部入学者は3153名です。その内訳は、文科一類から三類までの入学者が1301名、そして理科一類から三類までの入学者が1852名となります。また、このうち留学生の数は、40名です。これだけの数の皆さんが、これから素晴らしい教職員や仲間たちと出会って、大学生活の間に大きな成長を遂げていかれることを願っています。

私たちを取り巻いている周囲の状況の厳しさについては、皆さんも承知していることと思います。東日本大震災からの復興は言うまでもなく、経済の見通し、日本の国際的な地位、社会の少子高齢化、あるいは環境・エネルギー問題など、課題は枚挙にいとまがありません。しかし、多くの課題があればあるほど、また直面する課題が困難であればあるほど、「学ぶ」ということの意味は大きくなってくるはずです。また、若い皆さんに対する社会の期待も大きくなってきます。実際、この間、いわゆる「グローバル人材」の育成に対する社会からの期待には、大きなものがあります。東京大学は大学憲章の中で、「世界的視野をもった市民的エリート」を育成することを宣言していますが、「グローバルである」ということの意味は、ただ英語などの外国語でコミュニケーションが出来たり、海外で活躍したりということだけではありません。自分とは異なった考え方や生き方や価値観をもっている人たちと深く触れ合い、あるいは悩んだり、あるいは刺激を受けたりしながら自らを成長させていくこと、つまり、「世界の知恵を自分のものにしていく」ことだと、私は考えています。そうした出会いを意義あるものとしていくために必要なのが、知的な力です。また、そうした世界のもつ多様性との出会いを通じて、知的な力は高められます。

いま、「知的な力」という言葉を使いましたが、私はこの知的な力を必ずしも、良い成績がとれる、良い論文が書けるといった学問的な能力の意味に限定しては考えていません。こうした能力は、とりわけ研究者として生きていく場合は決定的な要件であることは言うまでもありませんが、皆さんの多くがそうであるように、社会で幅広く活躍する場合には、学問的な能力をベースとして、その能力を駆使しながら、多くの人々との交わりを通じて、社会の中で技術や制度や経済や文化などを創り出していくことの出来る、総合的な力をイメージしています。

皆さんにそうした知的な総合力を身につけてほしいと願うときに、何より皆さんに期待するのは、大学にいる間に死に物狂いで学んでほしい、ということです。たしかに皆さんはこれまで大いに勉強をしてきましたが、学問の世界で、あるいは社会で活躍していくためには、まだまだ沢山の知らないことがあるということを強く自覚して、学ぶことに対するハングリーさ、飢餓感をもってもらいたいと思います。人を成長させていくのは、そうした飢餓感です。

「学ぶ」ということについては、教科書や本で、教室で、実験室で学ぶということのほかに、社会の中で学ぶということも併せて強調しておきたいと思いますが、そのことには

後ほど触れるとして、何よりまず、大学に入ったばかりの皆さんには、これまでと同じ、あるいはそれ以上の努力と緊張感をもって勉学に励んでもらいたいと願っています。皆さんは、受験生活をやっと終えて少しのびのびしようとしていたところでまた勉強か、とうんざりするかもしれません。しかし、これからの時代は、皆さんがたんに日本の中でのエリートであるにとどまらず、世界のエリートとして活躍することを期待しています。そのために、さらに学ぶべきことは無限にあります。

日本の学生は、例えばアメリカの学生などと比べて概して勉強をしないと言われます。東大生の学習時間に関する調査があります。学部の1年生から3年生の学習時間は、平均して週6時間から10時間という学生が多いのですが、これは国内の他の大学とほぼ同じ水準です。それ以上の時間数を学習している学生の割合となると、国内の他の大学よりは多いのですが、アメリカの有力な大学と比べると少ないという傾向が明らかに見て取れます。私は常々、皆さんの知的な潜在力を、大学ではまだまだ伸ばし切れていないと思っています。

この場合に意識しておくことが大切なのは、学ぶ、学習をするということの意味です。大学での学習に主体的な姿勢が強く求められること、また、ただ知識の量を増やすというだけではないことは、皆さんは、よく承知していることと思います。すでに皆さんは、東京大学への入学を目指す受験勉強を通じて、大学での学習の基礎となる方法論をある程度学んできているはずです。

東京大学のアドミッション・ポリシーの内容を思い出してもらいたいと思います。そこでは、「東京大学が求めているのは、本学の教育研究環境を積極的に最大限活用して、自ら主体的に学び、各分野で創造的役割を果たす人間へと成長していこうとする意志を持った学生です」、と記されています。そして、「高等学校段階までの学習で身につけてほしいこと」として、各教科において、正確で十分な知識に裏打ちされた、論理的な表現力、分析的思考力、総合的な理解力、あるいは、問題や現象の本質を見抜く洞察力・読解力といったものを求めてきました。私たちはそうした力を、入学者を選抜するための便宜として求めているわけではありません。そうではなく、このような力が、大学で皆さんが主体的な学習を行い、知性に裏打ちされた創造力を培っていくために欠くべからざる資質であると考えているのです。

大学でこのような学習を皆さんが行っていこうとするときに、じっくり考える時間というものが必要になります。とにかく効率的に多くの知識を覚え込んでいく、というのとは違った性質の時間が必要です。このことについて、歴代の東大総長が、入学式の式辞の中でしばしば触れておられます。大河内一男総長、第18代の総長で、ちょうど私が大学に入学したときの総長ですが、昭和39年の入学式式辞の中で、大学では「自分で考える」ことが大切だと説きつつ、次のように述べておられます。「実務的な細目知識からしばらく離れ、基本の問題を理解し、見識をふかめ、そして自分自身の頭でものを考え、自分自身の意見、ともかく仮りにそれが下手な意見であっても、自分自身のものをもつことが諸君のなすべき第一義のことです。そのためにはどうしても、ある意味ではムダだと思われるような時間を諸君はもつことが必要でしょう」、と。また、「大学生活は、このように試行錯誤が許され、引き返すこと、やりなおすことが許されるところに特色があります」と述べて、「真剣な道草」の必要性を昭和58年に行われた入学式式辞の中で説かれたのは、第22代の平野龍一総長でした。

このような、一見するとムダな時間があるような、あるいは道草のような、そうしたじっくりとした学習を皆さんには大学で行ってもらいたいと思います。そうした時間をもつことも含めて、さきほど、皆さんにもっと学習のための時間をとってもらいたい、ということをお話ししたのです。

「学ぶ」ということ、それを、このように学問の場において真摯に行うとともに、さらにより広い社会的な場でも行っていくことが、

今日のように大学と社会との結びつきが強まっている時代には、とくに求められています。ただ、そうした問題意識は、ずいぶん以前からもしばしば語られてきました。

さきほどお二人の東大総長の言葉を引きましたが、もうお一人の総長の言葉を引いておきたいと思います。それは、第二次世界大戦後の東京大学の再出発にあたって、精神的な指導者としての役割を南原繁総長とともに果たされた矢内原忠雄総長の言葉です。矢内原総長は、戦争を経た経験に立って、「日本の大学が知的技術者を養成するところであって、人間をつくるところでなく人間養成という点では過去の大学は失敗であったという批判に対しては、われわれとしても反省の価値がある」としながら、さらに次のように述べています。

「教室及び実験室を通じて体得されるべき科学的精神と、教室外の生活によって得られるべき人間の形成、人生観の確立によって、諸君が単なる知的技術者たるに止ることなく、人間としての価値と責任を自覚して世に出でることが出来るならば、それがどれだけ諸君の益となるか、又どれほど日本並に世界人類の益となるか知れないのである。諸君が数年の後本学を卒業する日において、そういう方向に高められた諸君であり得るならば、それこそ諸君が大学で学んだ最大の利益であらう」、と。

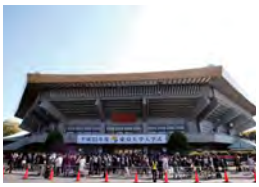
ただ、このように一見ムダと思われるような時間を過ごすことの効用を言い、あるいは教室外の生活によって得られるであろう人間形成の大切さを語るにしても、そうした時間の余裕を見つけるには、いまの東京大学のカリキュラムはかなり密度の高いものになっています。皆さんのご両親たちの時代と比べると、学問はさらに発展し、あるいは細分化し、複雑になっており、学んでもらいたい知識のボリュームも大きく増えています。それを何とか皆さんに身につけてもらおうと、教員は大変な努力をしています。

私は、こうした密度の高いカリキュラムや他大学と比較しても多い卒業単位数には、皆さんの知的な力を効果的に伸ばしていくためにそれなりの理由があると考えていますが、それと同時に、本当にこのままでよいのかという疑問も持っています。教育のあり方としては、もっと学生自身が主体的な学びを行うこと、またそのための時間的余裕のあることが必要ではないか、という思いです。実際、意欲と能力のある学生には、より主体的な学習や国際経験、社会体験が出来るような機会を、いま大学としても積極的に増やしつつあるところです。

ただ、こうした取り組みを大学の側で進めているだけでは意味ある変化は起きません。より良い教育の姿という餌を皆さんがただ口を開けて待っているだけでは何事も変わりません。ここでは、皆さん自身が、学問であれ社会的な事柄であれ、主体的に学ぼうとする意欲を行動で示してこそ、新しい段階に進むことが可能となります。そうした皆さんの主体性と大学の取り組みとが一体として動いてこそ、新しい時代を支える東京大学の教育の姿が生まれてくるものと信じています。

皆さんが、大学の中であれ外であれ、主体的な活動を行うためには、東京大学というのはまことに頼りになる組織です。東京大学の教員はおよそ4,000名近くおり、きわめて広範な学問領域をカバーし、しかも国際的にみても最高水準の研究を行っていることはご承知のとおりです。また、事務系・技術系の職員は約2,000名がおり、主なキャンパスは、本郷と駒場、そして千葉県の柏の3つですが、さまざまな実験施設や観測施設、演習林などが、北海道から鹿児島まで、日本全国に所在しています。さらに海外にも、各国の大学や研究機関との協力によって、何十もの研究拠点が設けられています。こうした東京大学の強さを、皆さんには存分に活用してもらいたいと願っています。

こうした強さと同時に、東京大学という組織のもっているいくつかの弱さも、この機会に率直に申し上げておきたいと思います。皆さんが自らの頭で考え行動しようとする時に、いまの東京大学の姿を所与のものとしてその枠の中だけに留まるのではなく、この組織の弱さ、限界も知り、場合によっては大学の枠



を超えて皆さんが活動するということも、私は期待しています。

そうした弱さの一つとしてまず挙げておかなければならないのは、学生の流動性という点での国際化の遅れです。グローバル化ということが大きな時代の課題となっているこの時期に、この面での遅れはきわめて深刻なものがあると私は考えています。もっとも、東京大学の教育研究活動全体として国際化が遅れているとは私は全く思いません。むしろ逆です。もともと東京大学という組織は、その創立の当初から国際的な交流と国際的な水準を強く意識してきた大学であり、また今日、研究の面では強い国際的競争力をもち、また教育の内容も世界の学術との密な交流の上に高い水準を具えていることは、自信を持って語ることのできる事実です。ただ、こうした伝統的な国際性の高さが、逆説的なのですが、学生の国際的な流動性の促進には阻害要因になっている面がある気がします。すなわち、東大の中にいても国際的な水準の内容の授業を受けることができる、そのために密度の高いカリキュラムが組まれている、あるいは大学院への進学率が高いとくに理系学生の場合は、大学院に入ってからでも国際的な経験を積む機会がある、などといった事情が、学部学生の国際的な流動性を減じているように思います。

ただ、それでも私は、学部生の間に国際的な経験をすることは、このグローバル化の時代にはきわめて重要なことであると考えています。実際、卒業時に学生に対して行っている学生生活の満足度調査というものがありますが、そこでは、たくさんの項目で全体として満足度が高い中で、国際経験については「満足」ないし「まあ満足」と答えた学生が28%、これに対して「満足していない」ないし「あまり満足していない」と答えた学生が68%、7割近くにも上っています。

この点に関連して注目しておきたいのは、アメリカの有力大学における学生の国際的な流動性の状況です。それらの少なからぬ大学では、学部学生の半分以上が、在学中に外国へ行って勉学をする、インターンをする、ボランティアをするといった経験を持っており、大学もそうした機会を持つことを奨励しています。アメリカですから、海外に出かけて英語をトレーニングするというのは、目的として意味がありません。それは、私がさきほどグローバル化の意味としてお話したこと、つまり、感受性が豊かで柔軟性があり失敗も許容される若いうちに、世界の持っている多様性と出会う経験をしておくこと、それが「世界の知恵を自分のものにし」、このグローバル化の時代に大きな力となることを、それらの大学、また、それらの大学の学生が強く意識している、ということであろうと思います。

そうした思いを私も共有をして、いま日本人の学生の海外への送り出し、そして海外の留学生の受け入れの拡大のために力を注いでいるところですが、システムが変化していくためにはどうしても時間がかかります。大学としての変化に並行して、皆さん自身も、これからの急速なグローバル化の動きについて認識を深め、また必要と思うチャレンジを行っていってもらいたいと思います。

このような、学生の国際的な流動性という問題のほかにも、東京大学はとくに多様性という点で、ある面での弱さをもっています。それは、かなりの部分が東京大学の強さと裏腹の関係にあるとも感じていますが、弱さとしてもっとも気になるのは、学部の学生構成の均質性です。つまり、首都圏出身の学生の割合の高さ、中高一貫の進学校出身者の割合の高さ、学生の家庭の平均収入の高さ、あるいは女子学生の割合の低さ、さらには、今日この場には海外からの新入生の皆さんも出席していますが、そうした留学生の数の非常な少なさ、です。このような学生構成は、現実の社会の状況と、あるいは現実の国際社会の状況と、大きくかけ離れており、皆さんが多様性に満ちた環境の中で知的な力や社会的な力を鍛える機会を減じています。大学としても多様性を増やすようにさまざまな努力を続けていますが、理想的な姿は一朝一夕には実現できないことです。ただ、皆さんが、自分の置かれている環境に、沢山の強さとともにそうした弱さもあるということを認識してお

くことは大切です。弱さは意識しなければ弱さのままですが、それを意識し克服しようと正面から向き合うことで、強さに転化させることができます。皆さんが、大学を卒業した後社会に出て、あるいは世界に出て仕事をしようとする時に、能力を競いあう相手となるのは、少なからずが、幅広い多様性を経験して、その中で揉まれてきた人たちであろうことに、想像をめぐらせてもらえればと思います。

このたびの式辞は、新入生の皆さんに注文の多いものとなりました。ただ、それは、大学としても、こうした課題を強く意識し、しっかりと取り組みをすすめようとしているということのメッセージでもあります。今日のこの入学式が、より素晴らしい教育を目指す大学と皆さんとの共同作業のキックオフとなることを願いながら、そして、新入生の皆さんの知的なハングリー精神の発揮に大いに期待をしながら、私の式辞を終えることにします。

〈平成二十五年(2013年)四月十二日〉

# 教養学部長式辞

東京大学教養学部長
石井 洋二郎

東京大学に入学された皆さん、本日はどうもおめでとうございます。また、ご家族の皆様にも、心よりお祝い申し上げます。

すべての新入生を最初にお迎えする教養学部の教職員を代表いたしまして、ひとことご挨拶申し上げます。

皆さんは、この日を迎えるまでに、人一倍の努力を重ねてこられたことと思います。その努力がこうして報われたいま、次の目標として、いったいどんなことを思い描いておられるでしょうか。

東大に入った以上、まずは勉学にいそしんで、早く先端的な学問の姿に触れてみたい、という期待感に満ちている人もいるでしょう。あるいは、とりあえず勉強よりもサークル活動に打ち込んで、友人の輪を広げてみたい、という人もいるでしょう。

中には、せっかく受験勉強も一段落したのだから、このさい新しい体験に挑戦して自分を鍛えてみたい、という人もいるかもしれません。今年度からは、初年次長期自主活動プログラム、通称FLYプログラムが開始されましたので、これに応募して海外留学や体験活動を計画している人もいると思います。

これからの過ごし方については、もちろん皆さんが自分で決めるべきことですが、どんな過ごし方をするにせよ、大学生活を始めるにあたって、ぜひ心にとどめておいていただきたいことがいくつかあります。

まず、第一に申し上げておきたいのは、あたりまえのことですが、大学での勉強は、高校までの勉強とは本質的に異なるものであるということです。

これまでの勉強は、もっぱら、与えられた問いに対する「答え」を探すことに主眼があったと思います。厳しい入学試験を経て、皆さんがこうしてこの場にいるということは、取りも直さず、限られた時間の範囲内で、相対的により多くの「正解」を探し当てる能力を身につけてきたということにほかなりません。

そのこと自体は、もちろん正当に評価されてしかるべきことでしょう。しかし、たとえば次のような問いが突きつけられたとき、皆さんだったらどう答えるでしょうか。

「労働することで何が得られるか？」

「あらゆる信仰は理性に反するか？」

「国家がなければわれわれはより自由になれるか？」

「われわれには真理を探究する義務があるか？」

いずれも即答することのできない問いばかりであり、皆さんはきっと頭を抱えて考え込んでしまうのではないでしょうか。私自身も、即答することはできません。

じつをいえば、これらはすべて、フランスの大学入学資格試験であるバカロレアの哲学部門において、昨年、実際に出題されたものです。つまり、フランスでは皆さんと同じ年代の高校生たちが、こうした問いを通過して大学に入学してくるわけです。

もちろん、文化も制度も異なる国の試験を単純に比較して、その良し悪しを云々するつもりはありません。また、こんな問題を出して、いったいどうやって採点するのだろうと、ひとごとながら、余計な心配をしたくもなります。けれども、皆さんがこれからの人生で直面するであろう問題の大半が、このように、あらかじめ決まった答えが用意されているわけではない「正解のない問い」であることは確かです。

皆さんは、ひところ話題になったマイケル・サンデル教授の「ハーバード白熱教室」のことをご存じだと思います。そこで提起されていたのも、「金持ちの税金を貧者に分配するのは公正か？」とか、「前の世代が犯した過ちについて、私たちにつぐないの義務はあるか？」といった、「正解のない問い」でした。

こうした問いを前にして必要なのは、もはや正解を探し当てる能力ではなく、筋道をたてて思考する能力であり、その思考の過程を他者に向けて明快に説明する能力です。重要なのは、最終的な解答に到達することではなく、思考のプロセスそのものである、と言ってもいいでしょう。

それだけではありません。皆さんはこれから、「問い」そのものがいったい何であるのか、どこにあるのか、そうしたことさえわからない状況に、しばしばぶつかることになると思います。「答え」が用意されていないだけでなく、そもそも「問い」自体が与えられていない―そうした事態に直面したときには、いったいどうすればいいのでしょうか。

当然ながら、私たちは自分で「問い」を発見しなければなりません。

身の回りに転がっている日常の小さな問題から、世界の未来や宇宙の成り立ちに関わる大きな問題まで、この世にはさまざまなレベルの問いが満ちあふれています。ところが、それらの問いは、ただじっと待っていても、私たちの前にひとりでに開示されるわけではありません。また、誰かが目の前に差し出してくれるわけでもありません。

自分の意思で、社会のさまざまなできごとや、自然の多様な現象に注意深く視線を注ぎ、それらと真剣に対峙し、さらにはこちらから能動的に働きかけ、自明と思われていることに疑問符をつけ、みずからそれを「問い」として構成するのでないかぎり、それはけっして「問い」として立ちあがってはこないでしょう。

では、こうして「問い」を立ちあがらせるためには何が必要なのでしょうか。これから「教養学部」で学ぶ皆さんの心にとどめておいていただきたい第二の点は、このことに関わっています。すなわち、「教養」という言葉の本当の意味はいったい何なのか、ということです。

私たちはしばしば「あの人は教養がある」という言い方をしますが、それはたいてい、自分の専門外のことも幅広く知っている、といったことを意味しています。しかしながら、いくら知識が豊富であっても、それらが単なる断片の集積にとどまっていたのでは、本当の意味で「教養がある」とはいえません。さまざまな知見が有機的に関連づけられ、全体として構造化され、いつでも動員できる状態にまで高められていてはじめて、それらは真

に「教養」の名に値するものになるでしょう。

そしてそのような意味での「教養」こそが、先ほど述べた「問いの発見」を可能にするものであると、私は考えます。いわば、教養とは鍛えぬかれた知的身体に宿る、「みずから問いを発見する力」にほかなりません。

皆さんがこれから過ごすことになる駒場での二年間は、しばしば「教養課程」と呼ばれますが、もし皆さんの中に、「教養課程」とは「専門課程」に進む前の予備段階であり、駒場での二年間が終わればそれで完了するものであるという考えがあるとすれば、そうした先入観はぜひ捨ててください。

「教養課程」とは、わずか二年間で「完了」するような性格のものではありません。それは皆さんが後期課程に進んだ後でも、さらには大学院に進んだり、就職したりした後でも、休みなく継続されなければならない、不断の営みです。

というのも、ある学問を深く究めていけばいくほど、それを他の分野と関連づけて俯瞰する力、すなわち「みずから問いを発見する力」としての教養が、ますます重要性を増してくるからです。その意味で、「教養」と「専門」は車の両輪のように、絶えず連動していなければならないものであると、私は思います。

さて、これから大学生活を始める皆さんに申し上げておきたい第三の点は、以上にお話ししてきた二点とは少し違ったレベルのこと、身心の健康に関わることがらです。

皆さんはこれから、高校までとはまったく異なる環境の中で新しい生活を始めるわけですが、はじめのうちは慣れない雰囲気に戸惑うことも多いでしょうし、クラスやサークルでの人間関係に悩んだりすることもあるでしょう。時には、自分はなぜ生きているのか、これからどう生きていけばいいのかといった、それこそ「正解のない問い」にとらわれて、出口の見えない森の中に深く迷い込んでしまうこともあるかもしれません。

これは皆さんの年頃には当然のことであり、何も特別な現象ではないということを、まず申し上げておきたいと思います。青春というのは、いわば無防備に肌をさらけだして、じりじりと照りつける直射日光の下を歩いていくようなものです。時には精神が火傷を負うこともあるかもしれませんが、それは大人として成長していくための、一種の通過儀礼のようなものだと思ってください。

けれども、中には自分の痛みを共有してくれる家族や友人が身近におらず、どうしていいかわからなくなってしまうケースも、ないとはいえません。そんなときは、自分ひとりで問題を抱えこまずに、どうぞ気軽に相談に来てください。教養学部には、悩みを抱えた学生さんたちを支援するために、さまざまな窓口が用意されています。また、私たち教員や職員も、皆さんが少しでも安心して学生生活を送れるように、できる限りのお手伝いをしたいと思っています。

そして、さらに具体的なお願いをひとつ申し上げておきます。それは、飲酒に関しては、くれぐれもルールと節度を守っていただきたい、ということです。

皆さんの大半は未成年だと思いますが、ご存じの通り、未成年の飲酒は法律で禁じられています。また、たとえ成年に達していたとしても、度を越したアルコールの摂取がきわめて危険であることは、言うまでもありません。

特に入学後間もない時期は、開放感にまかせて、つい羽目を外したくなってしまうものですが、どんな場合でも東大生としての自覚をもち、けっして守るべき節度を踏み外すことのないよう、強く注意を喚起しておきたいと思います。この場にはご家族の方も多数いらっしゃると思いますが、ご家庭でもぜひこのことを徹底してくださいますよう、お願い申し上げます。

入学式という晴れやかな場で、このようなお願いをすることは、いささか唐突であり、必ずしも適当ではないかもしれません。しかしそのことは十分承知しながらも、事の重要性を認識していただくために、あえてこの場を借りてひとこと申し上げた次第です。

以上、大学での学問のあり方から生活上の注意まで、いくつかのことをお話しいたしま

した。どうぞこれらのことを心にとどめた上で、それぞれの目標に向けて充実した大学生活をスタートさせてください。

最後に、皆さんがエリートとしての誇りを胸に、学問への高邁な理想とみずみずしい情熱を絶やすことなく、遠からず、現代社会に山積する数多くの課題に果敢に挑戦してくださることを期待して、私の式辞といたします。

# 祝辞

東京大学名誉教授
**黒川 清**

本日の入学式にお招きいただき、大変うれしく思います。新入生の皆さんに心からお祝い申し上げます。おめでとう。福島、宮城、岩手の3県からの皆さん、本当におめでとう。福島県相馬高校の「いなむら　たける君」そしてご両親本当におめでとう。そして、松村先生ありがとうございます。

ずいぶん以前の話ですが、私は東大の医学部を卒業し数年して渡米、14年余りを日本の組織から独立した「個人」として米国の大学で医師として教育、研究、診療に従事し、それなりのキャリアを積んできました。その年月のあいだに「外から見える日本」、日本にいるときには気付かなかった日本がよく見えるようになりました。「良い所も、弱い所も」。気になるのです。自分の国ですから。

予想もしなかったいきさつで、15年後に帰国。それ以来多様な機会をいただき、そのつど「世界の中の日本」という枠組みで自分の責務を考え行動し、日本社会の在りよう、日本の大学についていろいろと発言をしてきました。この一年数ヶ月は国会の福島原発事故調査委員会の委員長として私のことをご存知の方もおられるでしょう。「この委員長とはどんなひと？」と思った方も多いでしょう。私のことは、「グーグルする」ともっと知ることができます。今日の機会を与えてくださった、濱田総長以下、関係者の方々に感謝します。

東大は日本のトップ、世界でも有数の大学です。しかし、陰りが見え始めています。「秋の卒業や入学」、「入試の在り方」などの検討は東大の危機感の表れの一つです。しかし、これらはもっと大きな目標への手段の一つに過ぎません。

東大が発表するから、メディアが書き、社会が注目し、社会の変革のきっかけになるのです。東大にはそのような「日本での責任」があるのです。

ところで、世界の意欲ある若者達を引き付ける世界の一流大学は、この10年、学部教

育を大きく変化させています。国際性、多様性であり、学部時代の海外そして異文化の体験を重視しているのです。なぜでしょう。

この20年世界は激変しました「グローバル世界」です。日本の経済成長は止まり、あなた達は物心ついたころからあまり明るい話を聞いたことがないと思います。世界は相互依存を強めながら予想を超えるスピードで変わり、この変化はさらに加速されるでしょう。グローバル世界では、多様性、異質性、しかも「異能　異端の人」たち「ユニーク」であることなどが大きな価値と可能性を持つ、タテからヨコへ広がる世界と社会、そして柔軟な組織へと向かっています。個人個人の力量が世界から見えてしまう「フラットな世界」。そんな中で、大学もどんな学生を育てているのか世界から見られ評価されるのです。

世界の経済と政治の均衡がシフトしはじめ、国家統治と財政、産業、経済はダイナミックに変化し、格差、人種、宗教などの違いで衝突が起こり易い脆弱な世界になっています。地域の小さな衝突が世界に大きな影響を及ぼすのです。将来を担う広い世界の同世代が相互理解を深める、国家を超えた多様で多彩な個人のつながりと信頼こそが、これからの世界には必須の要件であると、世界の一流大学は認識している。多角的に自分をみる、世界を見る、考えられる人材に育てる、その責任を果たそうと努力しているのです。均一性の高い組織はこのような世界の多様で多彩な違いに気が付きにくい、対応しにくいのです。

あなた達の4人に1人が東大合格者数でトップ10の高校の卒業生、あなた達の5人に2人がトップ20の高校の卒業生。多くが中学高校の6年間同じ学校で学び、入学試験で選抜され、今日を迎えたのです。あなた達の中の女子学生は19%弱。この10年平均20%に届くかどうかなのです。合格率は男女でほぼ同じ。つまり女性が受験しない、東大に来にくい社会的背景があるのです。日本の主要大学の中で東大の女子学生比率は最低レベルです。皆さんがすぐに思いつく世界の大学、Harvard、Cambridge、Stanford、Princetonなど学部生は男女半々です。各大学が目標へ向けて努力しているのです。さらに米国の一流大学の例、たとえばアイヴィーリーグ8大学ではその4大学で女性が学長です。東大の弱さは多様性に欠ける、均質性が高い、国際性が低いことです。教員も学生も男性が多く、女性も、外国人も少ないのです。

自分の「良さ」、「強さ」、そして「弱さ」は違った環境に出てこそはじめて認識できるものです。グローバル世界の中での自分の「強さ、良さ」そして「弱さ」を知ることはとても大事です。自分を過信することなく「弱い」所を知ることで、謙虚になれる。その謙虚さこそが自分の「弱さ」を生かす「本当の自信」を生み出すでしょう。「自分を過信せず謙虚に」これこそがグローバル世界でどんな活動をするにしてもあなた達の「自信」となるのです。

世界ではとんでもないことがおこっています。デジタル時代の画期的な教育法、「ムーク MOOC」“Massive Open Online Courses”です。Stanford、MIT、Harvard、Berkeleyなどの大学の授業をだれでも、いつでも、しかも無料で　On-lineで受けることができるのです。自分の成績をこれらの大学の学生達、世界の若者達と共有できる、評価できるのです。世界の何千人、何万人という若者達が参加している授業もあります。大いに活用してください。自分の力がわかる、視野が広がる世界が広がっていくのを実感できるでしょう。

日本の大学では、教育に対する評価が軽視されていました。「学生による授業評価」に批判的な先生が多いのも事実です。しかし「ムーク」によって授業や教授の評価が世界にオープンになってきた。大学教育の革命です。大学は、先生にとっても学生にとってもお互いに世界に「オープン」な「学びの場」になってきたのです。デジタル技術は皆さん一人一人に、社会の肩書も国籍も国境も超えて自分の可能性を追求する力を与えている。「ムーク」で自分の可能性をさらに広げることができるのです。ムークを受けるうちに海外の大学へ行きたいと考え始める人もあなた達の中に出てくるでしょう。とんでもないことと思われるかもしれませんが、それは可能

なのです。あなた達、一人一人の選択です。

グローバル世界でのあなたの価値をつくる。これがあなた達、一人一人の、これからの世界での「ユニークな自分のキャリア」なのです。「ユニークな自分のキャリア」を作る、これはあなた達、一人一人の選択なのです。

いくら知識があっても、実体験のないことは所詮ヴァーチャル、頭の中の出来事です。実体験ほど大切なことはありません。これからの世界の将来を一緒に背負っていく世界の仲間達を知ることは、自分の将来にとってとても大事なことです。このような仲間が世界に広がる、ネットでつながっていることができる。日本と世界の多彩な人達を結ぶ「ハブ」に、あなた達、一人一人がなれるのです。ここにも東大の「秋卒業」「秋入学」のメッセージがあるのです。春でも、夏でも、秋でも、冬でも、休みのときには、まずは社会体験をする。いろいろ違った世界へ出かけてみることです。私は、特に海外へ出てみることを、皆さんにすすめます。

なぜ「海外」か？それは自分の将来にとって、グローバル世界の課題と自分の可能性に気付く機会が、飛躍的に増えるからです。そして日本を「外から」見る、自分と日本の「良さ、強さ、そして、弱さ」を感じ取れる、より大きな枠組みで日本を見ることができるからです。意識が大きく変わっていく、成長していく自分を実感するでしょう。そのような機会を積極的に増やすことです。

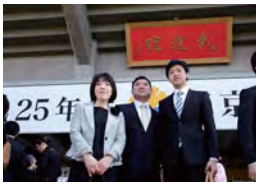
時には「自分のしたいことはこれだ、、、、」と気が付くこともあるでしょう。それは心のときめきか、直感か。心がざわめく、「それ」が好きだから、自分の「心の声」だから夢中になれるのです。海外の大学へ短期留学もよし、AIESECによる海外の企業や政府やNGOでのインターン、ボランテイアもよし、ギャップターム、ギャップイヤーなどなど、自分で行動する機会はいくらでもあるのです。

思い切って休学するのも賢い選択です。世界に出ることで自分の夢、大きな目標に目覚め活躍している多くの若者を知っています。そんな東大生を何人も知っています。皆さんが見違えるような成長をしているのです。だからこそ「外へ出てみる」「休学のすすめ」なのです。世界の自分を見つける「休学のすすめ」。

これからの世界の変わりようはだれにも予測できません。今日、新しい人生の出発点に立ったあなた達がそれぞれに世界の中で自分の大きな夢を見つけ充実した刺激に満ちた毎日を過せれば、こんなに素敵な人生はないでしょう。

「いまを生きる」というアメリカ映画があります。寄宿舎生活の「エリート」高校の先生と生徒の交流のものがたりです。私は、なぜかとてもとても感動しました。素晴らしい言葉がいくつも出てくるのです。なかでも「Carpe Diem」というラテン語、「いまを生きる」「今日をつかむ」、この言葉が私の心にとても響いたのです。私も色紙（しきし）や本にメッセージを求められることがあります。いつも「Carpe Diem　今日をつかむ」と書きます。あなた達のこれからの毎日が「Carpe Diem　今日をつかむ」であるとすれば本当に素晴らしいことです。「Carpe Diem　今日をつかむ」。

皆さんおめでとう。



東京大学総長
濱田 純一

# 平成25年度大学院入学式 総長式辞

このたび東京大学の大学院に入学なさった皆さん、おめでとうございます。これから皆さんが、学問の森にさらに奥深く分け入って、充実した学生生活を送り、大きな成果をあげてくださることを願っています。ここにいる皆さんの中には、博士課程に進学する人もたくさんいますが、さらに研究の最先端を究めてもらいたいと思います。とくに研究者の道に進もうと考えている皆さんの場合、私自身の経験を振り返ってみても、研究者人生における基本的な枠組みの少なからざる部分が大学院生の時期に形成されます。そのような貴重な時間を大切に過ごしていただきたいと思います。

また、今日のこの場には、皆さんの大学院への入学を支えて下さった、ご家族の皆さまにも多数ご出席をいただいています。心からお祝いを申し上げます。いまここにいる大学院生の皆さんは、いずれも、これからの日本の、また世界の多くの国々の知性の未来を担っていく人たちです。そうした人たちが皆さんの家族であることを誇りと感じていただければと思います。大学院での勉学、研究というのは、学部での勉強以上に、強い精神力と体力を必要とします。特定の研究テーマに情熱を注ぎ込むことは、肉体的な負担はもとより、自分の骨身を削るような精神的緊張を要する作業となることも少なくありません。そのことをご理解いただいて、ご家族の皆さまには、どうか、そうした厳しいチャレンジを日々続けている皆さんに、折に触れサポートを差し上げていただければと思います。

今年の大学院の入学者は、4475名です。学部の新入生は3100名余りですから、その約1.5倍近い数ということになります。これは、東京大学が、大学院重点大学、研究ということに重きを置いている大学であることの証でもあります。その内訳は、修士課程が2807名、博士課程が1297名、専門職学位課程が371名です。入学者の中で留学生の数は428名、つまり入学者の1割近くを占めていることになります。入学する人たちの中には、東京大学以外の大学からの皆さんも数多くいます。これらの皆さんが、東京大学に新鮮な力をくわえてくれることはもちろん、教育研究環境に多様性をもたらしてくれることを、大いに歓迎したいと思います。新しく東京大学に入学した皆さんは、最初は戸惑うことも多いと思いますが、この大学のシステムに早く慣れていただくとともに、皆さんそれぞれの個性を十分に生かして、活力ある知的コミュニティを形成し、その中で自他ともに成長を遂げていただければと願っています。

現代社会は、皆さんがすでに承知しているように、複雑で多様な課題を数多く抱えています。そこでは、「解決のモデルのない時代」だということもよく言われます。このように「解決のモデルのない時代」というような時代規定がなされることは、大学という組織にとっては大きなチャンスであり、また同時に、大きな責任を引き受けることにもなると、私は受け止めています。つまり、これまでの技術や制度や仕組みをどこからか真似るだけでは課題解決が出来ないとなれば、救いは、新しい知識や知恵を生み出すことの出来るところに求めざるを得ません。そうした場の最たるものが大学です。最近、大学改革をめぐる議論が盛んになってきています。その背景として、いわゆるグローバル人材の育成への期待ということもありますが、同時に、イノベーションという言葉に象徴されるように、これまでにないような新しい技術や経済・社会の仕組みなどが創造されていくことに対する大きな期待があります。そうした時代の期待にしっかり応え社会に役立っていくということは、この大学の大学院で研究を行う者の責任であり、かつ誇りでもあると思います。

いま私は、「社会に役立つ」という言葉を使いました。その言葉で通常思い浮かべるのは、社会に対してなんらかの具体的な成果をもたらすような活動、というイメージだろうと思います。しかし、学問研究には、必ずしもそのような直接的な形ではない成果があります。長い目で見れば、そちらの成果の意義

の方が大きいと言えるかもしれません。それは、学問研究に必然的に伴われるはずの、自由な精神、批判的な精神、そして、真理を求める好奇心と喜びということです。そうした精神を社会の一部として担い続けていくことは、大学、そして学術の持つ大きな価値であると、私は考えています。そして、そうした精神に対する敬意を持ち、さらにはそうした精神が普遍化する社会こそ、さまざまな困難な課題を乗り越えて新しい時代を創造していくことのできる社会であると思います。

皆さんの中には、東京大学の研究組織の一つで、Kavli IPMU、カブリ数物連携宇宙研究機構という名前を聞いたことがある人もいると思います。この機構は、文部科学省が定めた世界トップレベル研究拠点プログラムの一つとして、柏キャンパスを拠点に、研究の先端性や国際性などの点で素晴らしい成功を収めている組織です。ただ、そこでの研究のテーマは、「宇宙は何で出来ているのか」、「宇宙はどのように始まったのか」などといった、一見すればいまの社会に直接的に役立つことが見えにくい内容です。この組織を率いている村山斉さん、この先生は、カリフォルニア大学バークレー校の教授と東京大学の教授を兼務して、太平洋の上を頻繁に行き来しながら活動している大変魅力的な先生ですが、ある本のあとがきで、こんなことを書いておられます。

「IPMUではこうした宇宙の大きな謎に迫るため、数学者、物理学者、天文学者が集まって日々がやがやと新しいアイディアを考えています。いまはまさに『革命前夜』といった雰囲気が漂っています。」

「一方、『こんなことを調べて一体何の役に立つんだ？』と疑問に思われた方もいると思います。実は私は文部科学省や財務省、また一般の方々から同じような質問を受けることがありますが、いつもこのように答えています。『日本を豊かにするためです』と。『豊か』という言葉は、経済的な意味もありますが、心、精神、文化の豊かさも含んでいます。人生の半分近くを外国で暮らした私から見ると、日本はこうした広い意味での『豊かさ』をとても大事にする国です。これからもそうあってほしいですね」、そう、結んでいらっしゃいます。

もう一人、やはりこの組織で一緒に仕事をなさっている、カリフォルニア工科大学の大栗博司さんという先生の言葉も引いておきたいと思います。

少し前に、ヒッグス粒子の発見ということが話題になったのを、皆さんも記憶していることと思います。別にそんなことが分かろうと分かるまいと私たちの日常生活には何の関係もなさそうです。だのに、なぜ、報道などでも大きく取り上げられ、多くの人びとが関心を持つのでしょうか？ このことについて、大栗先生は次のように述べておられます。

「まだ何の役に立つのかわからないヒッグス粒子の発見は、私たちの知的好奇心を満たし、科学のすばらしさを教えてくれました。」

「こうした科学の成果が与えてくれる喜びは、文学、音楽、美術などがもたらすものと変わるところがありません。自然界の奥底に潜む真実を解き明かす科学は、この宇宙における私たち人間の存在について、深く考えるきっかけを与えてくれる。それこそが科学の喜びであり、私たちが大切にすべき価値だと思います。」

このように、「真実を解き明かす」という言葉、それをさらに理念化、抽象化すれば、「真理を探究する」という言葉は、日々の変化が激しく目前の課題への対応に追い回されることの多い現代社会では、さらには、真実であるとされることの危うさにしばしば出くわすような経験もしてくると、この私でさえ、もはや死語に近づきつつあるのではないかという錯覚にとらわれることもあります。

しかし、学問という世界だけに限らず、日々の仕事や生活においても、真実や真理といった究極的なものに対する憧憬は、何であれ、より良いものを目指して新しい課題に挑戦していこうとする行動の根底に存在しているように思います。真実や真理といったものを、意識的にせよ無意識的にせよ観念するからこそ、人は現状に満足しないで夢を持ち、前へ前へと進んでいくことが出来るのだと、

私は信じています。そうした意味では、「真実を解き明かす」、あるいは「真理を探究する」という観念に対して信頼や評価が与えられない社会は、明日の時代を築いていく活力を失っていくでしょう。皆さんが大学院で研究というものに携わる原点かつ究極の意味は、実はそこにあります。皆さんが真摯に研究に打ち込むという姿勢そのものが、何か具体的な成果を生み出す以前に、そもそも、こうした社会の根幹となるべき原理を再生産していく活動なのだ、その意味でも「社会に役立つ」のだということを、改めて自覚し、また誇りとして、研究に励んでもらいたいと思います。

このように自由な精神をもって真実を解き明かそうとする時に、「教養」というものがもつ大切さについて、皆さんにお話ししておきたいと思います。

大学院では皆さんは、これまで以上に専門分野、特定のテーマに入り込んで研究をすすめていくことになります。そういうタイミングで、改めて「教養」という言葉を聞くのは、皆さんには違和感があるかもしれません。教養を学ぶということは、もう大学の１，２年生の時期で終わったと考えているかもしれません。たしかに、大学に入って専門分野を学ぶに先立って、学問の世界の豊かな広がりを理解しておくことは大切なことです。しかし、教養を学ぶということは一生涯にわたって続いていくものだと、私は考えています。

東京大学の歴代の総長には沢山の素晴らしい方々がいますが、そのうちでも、第二次世界大戦終了直後に就任された南原繁総長は、戦後の東京大学の制度の基盤を作ると同時に精神的な基盤を作られた総長です。南原総長は、戦後の大学の復興にあたって、「人間性」や「精神の自律」という観念を柱に据えられましたが、新たに東京大学に教養学部が発足したこともあって、しばしば「教養」の意義ということに触れておられます。昭和２６年の入学式、やはり今日と同じ４月１２日という日に開催されていますが、そこでのお話の中に、次のような一節があります。少し長いのですが引用させていただきたいと思います。

「教養の意義は、さやうにして、諸君のこれからの専門知識と研究が展開されてゆく普遍的基盤を提供するばかりでない。その目ざすところは、畢竟、もろもろの科学を結びつける目的の共通性の発見であり、かやうな目的に対して深い理解と価値判断をもった人間を養成することに在る。この意味において、教養は、まさに時代の高きに生きんとする人間の何人もが、欠くことのできない精神的条件である。

かやうなものとしては、それは諸君が、大学において単に教養科目を修得したり、教養学部を修了することをもって、終わるものではない。諸君のすべての学究時代を通し、否、全生涯を通して、常に心がけなければならぬところのものである。それは究極において、われわれがおのおの一個の人間として、人生と世界に対する態度―随って、深く道徳と宗教にまで連なる問題を決定する。かくして、遂にわれわれの裡なる人間性の自覚と独立に向はしめずには措かぬであろう。

然るに、われわれが生を生きるのは、他ならぬ他人との共同生活においてである。だから、教養とは、結局、われわれが自主的に価値を選別し、真理と自由と思惟するところを、社会と同胞との間に実現する能力と勇気を具えた社会的人間の養成といふことに外ならない。そして、それを可能ならしめる根拠は、あくまで人間の自由の自覚と精神の自律である。」

このお話は、ちょうど私が生まれた頃になされたものですが、言葉遣いは別として、その内容は今でも実に新鮮です。ここには、教養を身につけるということが持つ意義が多様に、かつ統合的に示されています。

教養を学ぶことの実践的な意味合いということで言えば、大学に入ったばかりの時に受ける教養教育が、まさに「これからの専門知識と研究が展開されてゆく普遍的基盤」ということになります。また、「もろもろの科学を結びつける目的の共通性の発見」という言葉がありましたが、それを無理矢理、現実的、実践的に解釈すれば、それは、専門分野に進んでからも他の専門分野に目配りすることの必要性、ということにつながってきます。

専門分野に限らず、幅広い分野の知識をもつ、幅広いものの見方ができるということは、「学際」であるとか「学融合」という言葉もありますが、今日では、専門分野に進んでからもさまざまなところで求められるようになっています。たとえば、さきほど触れたＩＰＭＵ、数物連携宇宙研究機構の活動がまさしくそうですし、あるいは、ナノバイオテクノロジーや医療技術などの分野における医学と工学との連携なども、よく知られています。すべてが複雑化しつつある現代社会においては、現実の課題を具体的に解決していこうとすると、複数の学問分野の連携が求められるという場面が非常に多くなってきています。こうした意味で、皆さんが大学院で専門分野を深く掘り進めていくにしても、同時に、知識や知恵を、また、ものの見方をより幅広くしていく努力をつねに怠らないというのは、とても大切なことです。

もっとも、さきほどの南原総長の言葉は、そうした直接的に実践的な意味を超えて、人格の陶冶にかかわる内容が含まれています。むしろそれが、南原総長の伝えたかったことであるはずです。そこには、知的な活動に携わるということの本質的な性格が、しかも、私たちが日頃つい忘れがちになる究極的な意味が、述べられているように思います。その大切な部分の引用をもう一度繰り返しておきたいと思います。

「教養とは、結局、われわれが自主的に価値を選別し、真理と自由と思惟するところを、社会と同胞との間に実現する能力と勇気を具えた社会的人間の養成といふことに外ならない。そして、それを可能ならしめる根拠は、あくまで人間の自由の自覚と精神の自律である。」

大学院での研究生活はどうしても特定のテーマに特化した研究活動になりがちです。しかし、皆さんには、時には、このような言葉も思い起こしながら、大学院で自らの専門性を鍛えていくとともに、自由な精神を具えた人格としての成長も遂げていただきたいと願っています。

自由な精神を具えた人格、これが大学院での皆さんの理想像の一面だとすると、最後に一言申し上げておきたいのは、これから皆さんが研究の成果として発表していくものは人格の一部である、という意識をしっかりともっていただきたいということです。

論文であれ研究報告であれ、何かを発表するというのは、自分の人格の一部を外に表現するということに他なりません。人間の精神は、たんなる中継器のように、外から入ってきた情報をオウム返しに又外へ送り出すといった類いのものではありません。そこには、必ず人間としての精神の作用が介在します。つまり、自分で新しい考え方を、新しい論理を、新しい概念を、新しい言葉を、新しいエビデンスを、探し求める過程が、表現をするという行為の前に存在するはずです。そのように精神が介在するからこそ、人は成長し、またそこから創造がなされるわけです。

そうした意味で、皆さんが何らかの形で研究の成果を発表するとき、安易に人が書いた文章を窃用する、あるいは裏付けとなる資料やデータを欠いたままに発表を行うといった行為は、自らの人格を損なうことになります。研究に従事するという活動は、研究対象、研究テーマとの戦いというより、実は自分自身との戦いという面が少なくありません。今日この場にいるすべての皆さんが、幅広い教養に裏打ちされた自分の全人格をかけて豊かな研究成果を生みだし、学術の未来の可能性に大胆なチャレンジをしていくことを、心から期待しながら、私の式辞を終えることにします。

〈平成二十五年(2013年)四月十二日〉

東京大学大学院数理科学研究科長
坪井 俊

# 式辞

東京大学大学院修士課程に入学された皆さん、博士課程に入学、進学された皆さん、本日はご入学ご進学おめでとうございます。ご家族の皆様、関係者の皆様、誠におめでとうございます。東京大学大学院の教員一同、研究の仲間として皆さんを迎えられることを大変嬉しく思っております。

この東京大学には学術研究の伝統があります。また東京大学は、新しい時代への最先端の研究が日々行われているところです。皆さんには、この東京大学の環境を生かして存分に研究に邁進していただきたいと思います。社会の中の東京大学大学院を考えますと、皆さんが研究に邁進し学術の発展に寄与することは、社会がそのために投資していることであり、皆さんの使命でもあります。

しかし、そういうことはわかっていても、これからどう研究をしていくかということについて、不安を持っている方もおられるかもしれません。私自身、この東京大学で数学、特に幾何学の研究をしてきました。しかし最初から数学の研究がどういうものであるかわかっていて研究を始めたわけではありません。

私は三十七年前に修士課程に入学しました。その時の大学院進学の動機は何だったのかを時折思い出すことがあります。確かに大学で勉強した数学は面白いものでした。面白いものをもっと見てやろうという気持ちもありましたが、正直な気持ちは、「それまで勉強したことでは、まだ自分は、何かわかっているとはいえない」というものでした。大学院以前の話となりますが、数学科に進んでみると、専門の講義、演習、セミナーというものは、それまで勉強してきたことと大きく違っていました。皆さんが大学生としてそれぞれの学科で体験されたことと同じだと思います。内容が高度である上に、それまでに経験したことのないスピードで進むのです。それが消化できないことが進学の動機であったわけです。

そして修士課程に入学しましたが、強い問題意識を持って研究が始められたわけではありません。「まだ自分はわかっていない」という気持ちを引きずって目の前にあるものを勉強していました。つまり、セミナーや研究会に参加し、薦められた論文を読んだりしていました。そういうわけですから、正直なところ、ここにおられる特に修士に入学された皆さんには、明確な研究目的をもって始めなければいけないとは、なかなか言えません。

少し話が変わりますが、理系の学問分野では「次元」がしばしば登場します。「点は0次元、直線は一次元、平面は二次元、我々は三次元空間に暮らしており、時間も考えに入れると四次元に生きている」ということです。次元とは何かを考えることは、数学自体においても非常に面白い問題です。数学の厳密化のために、「集合」を定義し、その上の様々な「構造」を定義し研究するという形に、数学自体が十九世紀の終わり頃から変わっていきました。「次元」の本質を考えることは、カントールが集合論を創った時からの問題ですが、現在でも面白い研究が行われています。例えば、フラクタルという整数値ではない次元によって図形の特徴を表現できることをご存じの方もおられると思います。

私も次元の問題に出会いました。図形の性質の中で次元は最も基本的なものであり、二次元、三次元、四次元の空間それぞれに固有の理論があります。しかし大学院生の私に理解できたこととして、印象に残っていることの一つは、多くの幾何的な構造においては、次元の「差」が重要になるということでした。四次元空間のなかの三次元の図形を考えるときに鍵になることは、その次元の差が１であるということです。私自身は、次元の差が重要ということを意識するようになって、研究の対象が見えてきて、自分の研究の方向を考えることができるようになりました。新しいことを見つけ出すには、気持ちを強く持ち続けることが必要でもありました。その後、研究の面白さがわかること、つまり、苦しい思いをして山を登っていて、急に目の前が開け、頂上への道筋が見えるというようなこともあって、それに励まされて研究を続けてきました。

この話では、研究は頑張っていれば、やがて何とかなると言いたいのではありません。次元の差が重要だということに、一人で勉強して自然に気が付いたのではないと言いたいのです。気が付いてみれば、様々なテキストにも書いてあることですから、一人で気が付いてもよかったはずのことかもしれません。しかし、こんな単純なことに気付いたのも、実際には友人や先輩と普段から話をしていたからです。

数学の研究は、チームを組んで行う必要はないものです。共同研究を行う場合でも、三人を超えるものは珍しいと思います。論文は、普通は一人で書きます。しかし、それは他の人と関係を持たず一人で研究を行っているということではありません。一人でひたすら研究に励む時間も必要ですが、新しいアイデアについて他の人と議論をすることが必要で、それは非常に重要です。他の人のアイデアを聞くことと、自分のアイデアを他の人にわからせること、それが自分の研究を前進させる重要なプロセスです。話をすることで、問題の核心、問題のとらえ方がわかってきます。研究というものは、結局は人間の営みですから、このような議論をすることから進んでいく面が大きいと思います。そういう議論ができる環境あるいはコミュニティーが、伝統の力、最先端を担う力の一部でもあります。その議論のために、私のいる数理科学研究科では、毎日、午後のコーヒータイムを設けており、そのコーヒータイムの間、学生、教員が、コモンルームという黒板のある共同研究室に集まって、色々と雑談をしています。この雑談は、研究の重要な一部分です。

大学院生として研究される皆さんにとって、どの分野を専攻される場合でも、他の人との議論あるいはコミュニケーションは、研究を進める上で必要不可欠であると思います。自分から進んで話をすることをお勧めします。

ところで、アイデアというものだけで言うと、普段の生活の中で見たもの、聞いたものから出てくることも多いと思います。現在自分が行っている研究がうまくいかないと愚痴を言っている最中に、解決策が浮かんでくることもあります。ここにはご家族の方もいらしていただいていますが、ご家族と日常の会話をしていることは、大学院での研究の大きな支えになっています。研究以外の話をすることも重要なことです。

これからの修士課程、博士課程の2年間あるいは3年間で、周りの人とうまくいっていて、研究費も十分にあって、自分の研究も順調であるということは、実際にはめったに起こりません。自分の進路の問題や研究以外の事も含めて、うまくいっていることはもっと難しいことです。私自身もそうでした。気持ちを強く持つことも必ずしも容易ではなく、いろいろと迷って、友人や先輩に話を聞いていただきました。あなたの周りのほとんどの大学院生は、あなたと同じように何らかの問題を抱えているものです。自分では抱え込めないということもよく起きます。そのときには周りの人に相談してほしいと思いますし、周りの人は友人として話を聞いてほしいと思います。大学院の専攻あるいは研究室に入ってしまうと知り合いがいないということも起こりますが、研究室の教員もスタッフも相談されるのを歓迎しています。また、本郷、駒場、柏及び白金の各キャンパスに学生相談ネットワーク本部という、そのための相談窓口もあります。そこに行けば大学院生活を豊かにするためのヒントが得られると思います。この場面でもご家族の方に支えていただくことがあるかと思います。ご家族の方からも何かありましたらご相談いただきたいと存じます。

さて、大学院生となられる皆さんは社会から見ると研究者の一員です。皆さんの研究には社会の期待が寄せられていることは最初にも申しました。その研究において最も重要なことは正直であることです。ごまかしてはいけない、うそをついてはいけない、ということです。研究に向き合う姿勢の問題です。研究成果の発表においては、自分自身の研究を自分自身の言葉で発表する必要があります。自分の研究成果ではないものを自分の名前で発表するのは論外です。社会の中で研究をさせてもらっているという研究者の立場であれ

ば、誰にでも説明できる研究姿勢を続けていかなければなりません。自分の良心に恥じない行動をすることです。正直な研究を行っていること、そしてそれを正しく発表することが、研究成果を未来につなぐことになります。それは、自分の研究分野の中での自分自身の信用を作るものでもありますが、社会へ正しく伝えることの必要性は、2年前の東日本大震災の折に、科学者に厳しく問い直されたことでもあります。これから研究を始められる皆さんも、そのことを踏まえて行動していただく必要があります。

いろいろと申しましたが、修士課程、博士課程に入学進学されると、立場も変わりますし、環境も変わります。新しい環境で新しい気持ちで研究に取り組むことで新しい成果が得られます。確かに場所を変えるというのは、研究を進めるうえで非常に意味のあることです。私も二十六歳から二十八歳までの間ジュネーブ大学に行かせてもらいました。そのときに出会った多くの人たちと三十年以上たった現在でもやりとりを続けていますし、彼らと共同研究もしています。皆さんも大学院での研究を進めると国外で研究したり発表したりする機会が増えます。そこで多くの友人を得ることもできます。我々教員一同もそういう形で皆さんが自分の研究の幅を広げることを望んでいますし、出来るだけ多くの機会を提供しようとしています。それは伝統と最先端がともにある東京大学大学院の一員になって得られることの一つでもあります。そのときには新しいことにチャレンジする気持ちも必要です。

入学進学された皆さんが、この東京大学の環境を生かして存分に研究に邁進していただき、いま申しましたように多くの方とコミュニケーションをとり、世界を舞台に素晴らしい活躍をされることを祈念して、私からの式辞とさせていただきます。

# 祝辞

## CHALLENGES OF THE TWENTY-FIRST CENTURY WORLD

元全米科学財団長官
**Rita Colwell**

It is an honor and pleasure to speak today at the entrance ceremony of the University of Tokyo. It is a special occasion because you are entering the next phase of your life, an important and critical time for all of you. You are living in a "golden era" of scientific discovery, where breakthroughs are occurring almost daily and virtually in every field, from astronomy to material science to genetics to engineering. Today's research moves so seamlessly into application that it is sometimes difficult to notice the transition. Across the science and engineering enterprise, boundaries are increasingly difficult to distinguish between and among disciplines, especially information technology, nanotechnology, and the many areas embracing biocomplexity, the complexity of life itself. But it is true also for the social and behavior sciences in this new era of "big data", when computational capacity reaches beyond imagination. The most exciting areas are in these "blurred connections", these fuzzy connections between disciplines where knowledge in one field answers questions in another field.

New tools have opened up breathtaking vistas for molecular and biochemical scientists, enabling discovery of microbial life at the most unexpected frontiers on Earth. For the first time we have within our grasp the intellectual construct—to understand complexity of life and of the human brain—and the technical tools, from computers to genomics, to bring to light the mysteries of an heretofore unseen complex world of microorganisms all the way up to the human brain. The challenge is to provide imaginative education and training for the unknown future. In shaping the educational experience for your generation, your university education should match this dynamism of discovery and should also reflect responsibility to your global society. You are in the vanguard, the front line, of an exciting new era. Science, engineering, and technology are moving beyond the descriptive and the quantitative—into an unprecedented arena of simulation, visualization, and prediction.

Human health and medicine have, without question, benefited from advances in molecular biology, fundamental chemistry, physics, and mathematics, but a new frontier in scientific exploration provides the next major advance for the health sciences, namely the integration of the ecological sciences, conservation biology, systems engineering, and medicine. Ecosystems analyses are proving insightful. Most striking is merging of what were considered very different data bases and making them integrated and inter-operable by using advances in information science and technology. Very large data sets accumulated by ecologists, toxicologists, public health scientists, climatologists, and atmospheric scientists are now being merged and mined to yield new understanding and discovery of fundamental principles previously unrecognized because of limitations in the past from disparate and unlinked systems, the best example is in understanding the function of the brain. And most fortunately, these advances are being made at a time when the most of pressing problems face human civilization and these include poverty, climate change, and conflict among nations.

It is appropriate at this important milestone in your life, to focus your energies on thinking about what lies ahead of you. I can anticipate a future in which you will make your unique and collective contributions in

serving and leading your country and the world. Leaders have a vision of the future and a capacity to create that future, no matter what obstacles block the way. Those among you with ambition to be writers and artists will create stories and paintings and music that will enrich our lives. Breaking new ground is imagination in action. It is important to have a generation, your generation, of pioneering leaders who can meet the challenges that face our global society.

Let me give you a brief example from the realm of science. Contemporary society is increasingly rooted in, and dependent on, science, technology, and engineering. We need scientists and engineers to continue the momentum of discovery and development. The twenty-first century world needs an educated and well-trained workforce to run the complex societal engine and maintain the global marketplace of the future. You are the next generation of productive, innovative workers and specialists. Your skills will be essential to the economic momentum of industries and institutions in the future.

At the same time, we are a "world neighborhood" of seven billion people, most of whom are disadvantaged. Yet the poorest of the poor still maintain hope for the future. We will need leaders of vision who can find ways to realize that hope. I cannot predict the future, but I can readily see the trends. We will need citizens literate in both science and the humanities—in the twenty-first century and beyond. We need articulate and ethical leaders with good judgment who can help navigate an increasingly complex world. Those will be the leaders in the classroom, in government, and in the business community.

This entrance ceremony today, then, is a major step toward creating a better personal future for yourselves. You are ready to work hard to succeed in whichever fields you have chosen to enter. Therefore, I challenge you to "change the world". I know that sounds like a lofty and unrealistic, ambitious goal. But each of you here today has a passion...some of you want to write novels, some want to heal others, and some of you want to uncover new knowledge, perhaps win a Nobel prize. But do not forget service to others. Your passion is uniquely yours, with your own vision, your own versatility, and your passions, you possess what will start a quest to change the world.

We all can acknowledge that we live in a time of change. New scientific theories, new forms of music and literature, new technologies, cures for disease, new psychologies, and new visions...these benefits come from those who dare to take risks and challenge conventional wisdom. Each of you has a unique contribution to make and your contribution can help to make our world safer, kinder, and more compassionate.

You are beginning your university studies in a world few could have imagined a hundred years ago, at the dawn of the twentieth century. Social and career choices were more limited then. Few women worked. Those who did were usually limited in their careers. To the women entering the University of Tokyo today, I would like to provide a special message. Today women have an important role to play in the "knowledge society". Countries of the world thriving economically, like Brazil, are those with the greatest participation of women in science and technology and the greatest number of women in the workforce. It is important that, as women, your educational and professional aspirations be fulfilled. To the women and the men entering graduate studies at the

University of Tokyo today, I urge you to seek a flexible education and training opportunities that allow you to make choices and decisions about your own lives. Japan is a leading knowledge based economy of the world and it is a knowledge society that must include both women and men to an equal extent to maintain its leadership among nations.

Let me share one story. In my career, I have had the privilege and satisfaction to help understand where in the aquatic environment the bacterium causing the infectious disease, cholera, makes its home. I have studied the bacterium, Vibrio cholerae, for more than thirty years. Eventually my students and I were able to prove that cholera is caused by a bacterium that occurs naturally in rivers, estuaries, and coastal waters. And the bacterium has a dormant stage that fooled researchers. It literally hides between epidemics. We found that the cholera bacterium is associated with plankton found in virtually all rivers and streams. But purifying water is an elusive goal in poverty-stricken countries like Bangladesh, where boiling water to obtain safe drinking water is not an option. There simply isn't enough firewood to burn.

A least expensive option is filtering out the plankton to lessen, and possibly curb the disease. We found that simple cloth filters made an excellent and affordable filter for impoverished remote villages. Our team of researchers taught the women in those remote villages of Bangladesh how to filter their water. And we have learned in a follow up study that they continue to filter and the cholera rate is significantly lower, reduced by nearly 50%.

Our work is a small step toward reducing the number of people, especially children, who die each year from cholera. We were ordinary people committed to our passion and able to make a difference. There are few things more gratifying in life than helping others help themselves.

There is an African proverb that says, "the lack of knowledge is darker than night." There is a lot of darkness remaining in the world. There are still many things to change for the better. And simple solutions derived from understanding the complexity of nature can be powerful.

This brings me to my conclusion. Living in a global society rooted in science and engineering brings many benefits, and it also brings important responsibilities. It is not just up to scientists and engineers to decide how we apply these new capabilities. All of us must be engaged. And it is no longer enough for scientists and engineers alone to generate new knowledge. We need a partnership with social scientists, philosophers, artists, and musicians. Our task as a global society is to understand the issues and to be informed partners in the debate about how knowledge is used.

Your studies at the University of Tokyo, with its fine reputation earned over more than a century of excellence, are the beginning of a life long journey in learning and in changing the world to become a better place.

You will not lack for challenges, for excitement, or for gratification, and I know that you will change the world.

Congratulations and my best wishes for every success and happiness in your years at Todai and in your future careers.

# 入学式・大学院入学式のひとこま

写真撮影:尾関裕士

# 東大を海外へ広めるために
## —英語略称をいま一度考える—

THE UNIVERSITY OF TOKYO

「学内広報」No.1424(2012.4.23発行)では、「東京大学の英文呼称」を特集しました。その特集記事の中で、英語の略称が統一されることなく様々な略称が混在している現状について説明しました。
それから1年経った今回の特集では、「東京大学の表象に関する懇談会」が一年をかけて議論し、まとめた英語略称の提案をご紹介するとともに、改めて構成員の皆さんとグローバルに成長する東京大学にふさわしい英語略称について考えたいと思います。
特集記事をご覧になって、是非皆さんのご意見をお寄せください(詳細は最後)。

## 英語略称を広める

東京大学の表象に関する懇談会ワーキンググループ主査
大学院総合文化研究科教授
**真船文隆**

東京大学の英語の正式名称はThe University of Tokyoですが、英語略称はご存知でしょうか？本学では、平成19年8月30日の役員懇談会で、「Todai」を英語略称とすることが決定されています。しかし、その決定事項が必ずしも全学的に共有されず、「Todai」の使用も徹底されることなく現在に至っています。実際に、コミュニケーションセンターではUTマークの商品が販売され、東京大学学術機関リポジトリはUT Repositoryと名付けられています。

今日、東京大学が、日本の最高学府から世界のリーディングユニバーシティへと展開するために、さまざまな全学的な施策が進められつつあります。これと並行して、将来に対するビジョンや方向性を海外に広めるための発信力の強化も必要です。そのなかで、英語略称はとりわけ重要なはずですが、TodaiやUTをはじめ複数の略称が使われ続け、海外からは同じ大学とは認識されずに、混乱を招いているのが現状です。「東京大学」の確固たるイメージを海外へ打ち出していくためにも、略称も統一してPRしていくことが求められます。また、その略称は、東京大学のことをよく知っている研究者はともかく、ほとんど知らない海外の学生でも東京大学であることを認識でき、かつ親しみやすいものであることが望ましいでしょう。

これらの背景を踏まえて、平成24年3月に「東京大学の表象に関する懇談会（座長　山下友信　法学政治学研究科教授）」が設置され、英語略称、大学ロゴマーク、印刷物などの表象にかかわる課題が改めて議論されてきました。その結果、複数の候補の中から、英語略称に最もふさわしいものとして、「UTokyo」（ただし、大文字、小文字、ハイフンの有無などについては、将来ロゴに展開する場合にデザインの観点から決める）が提案されています。世界的にも広く認知されている日本の首都Tokyoを略称に含めること、英語の正式名称に近いこと、はじめのUの字が大学を示す例も数多くあり自然に受け入れられるのがプラス面であると懇談会からは提案されています。一方、「UT」は、すでに海外の多くの大学で略称として使われていることから、UTから東京大学のみを想起させるのは困難である、また「Todai」は国内では広く認知されているものの、外国人にとっては理解が困難であると指摘されています。

昨年末に懇談会がUTokyoを提案し、その内容が科所長会議で報告されました。その後1月から2月にかけて各部局で話し合われた結果を2月末までに広報課が集約したところ、賛成意見が多数という状況です。略称は大学の「顔」にあたるものなので、十分慎重に審議されるべきでしょう。しかし、一番大事なのは英語略称を決めることよりも、決まった一つの英語略称が全学的に共有され、徹底して使用されることです。本学の最大の発信力は、教職員一人一人にあります。皆が心を合わせて統一した英語略称を用いることにより、東大の海外での存在感を高めていくことができるのです。

### これまでの経緯

以下のような流れで英文略称に関する議論を進めてまいりました。

**平成23年度**
有識者懇談会にて表象問題を議論
**平成24年3月**
表象に関する懇談会及びWGの設置
**平成24年11月**
英語略称に関する報告書を役員懇談会へ提出
**平成24年12月**
科所長会議へ報告書を提出、意見照会

# 表象に関する懇談会の新英語略称の提案

**UTokyo**

※大文字/小文字、ハイフンやスペースの挿入等を含む正式な表記については、今後の議論、デザイン化の作業の過程で決定する。

提案の理由：

・最大の利点は、世界的にも広く認知されている日本の首都「Tokyo」を略称に含めることにより、これまで本学を知らない外国人にも「東京にある大学」とまず理解してもらえる効果が期待できる。

・英文名称「The University of Tokyo」からの直接的な略称であるため、混乱がない。

・U—という略称については、UMass（マサチューセッツ大学）、UPenn（ペンシルバニア大学）、UVic（ビクトリア大学）等の例がある。

## その他の候補のメリット・デメリット

### Todai

国内では浸透しており、海外でも東大にゆかりのある人には通用し、日本の大学らしいユニークさはあるが、英文名称（The University of Tokyo）を類推できず、Todaiが何を意味するのか外国人には理解できない。また発音もしづらい。さらにグローバルに展開する「TODAI」という名称のレストランチェーンが存在するため、これ以上当該英語略称を推し進めることはふさわしくない。

### U of Tokyo／Univ of Tokyo 等

The University of Tokyoからの直接的な略称であり、ネイティブの語感にしっくりくるものであるが、略称としては長く、使いづらい。

### UT

一般的な大学の略称であり、The University of Tokyoからの直接的な略称である。しかしながら略称をUTとする大学が多数ある（University of Toronto、The University of Texas等）ため、独自性が出せないのが最大のデメリット。今後新たに本学を海外にPRするには弱い。

### Tokyo

街名を略称とする大学は多数あり、首都名をつけた大学としての存在感があるが、単独で使用する場合には単なる街名と混合する恐れがあり、大学を表すことが分かりづらい。

## 英語略称の統一に向けて —学内での問題共有・議論から周知・徹底へ—

平成19年度の役員懇談会で本学の英語略称は「Todai」と決定されたにもかかわらず、それが浸透せず現状に至ったのは、決定とともに周知徹底しなかったことに原因がありました。

同じ轍を踏まないために、この問題を構成員の皆さんに共有してもらい、一緒に考えていきたいと思っています。そして、１つの英語略称が定まったら、積極的に発信するとともに、学内にしっかりと周知して、部局、構成員一人一人に徹底して使用してもらうはたらきかけをしていきます。

## 構成員の皆さんの意見をお待ちしています!

東京大学の英語略称について、
本部広報課（pr@ml.adm.u-tokyo.ac.jp）
までご意見を是非お寄せください。

制作：本部広報課

お寄せ頂きたいご意見

- 懇談会案の英語略称「UTokyo」について
- 今後の英語略称の展開のしかたについて
- その他、英語略称に関すること、大学の表象に関すること

# ひょうたん島通信

大槌発! 第13回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱(ほうらい)島という小さな島があります。
井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。
ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。

## 大槌での学生生活を振り返って

**山根 広大** 大気海洋研究所海洋生物資源部門資源生態分野特任研究員

私は、2008年4月～2011年3月までの3年間、大槌にある国際沿岸海洋研究センター（沿岸センター）に博士課程の学生としてお世話になった。私は大槌町から50kmほど北にある宮古市の出身であるが、それまで大槌とはあまり接点がなく、沿岸センターに所属してはじめて大槌とよく親しむこととなった。沿岸センターはきれいな山と海に囲まれ、フィールド研究はもちろんのこと大槌の大自然を満喫できる素晴らしい場所にある。研究室から海辺まで徒歩1分程度で行くことができ、天気の良い夕暮れには学生同士でよく釣りを楽しんだ［写真］。釣れる魚でもっとも好きなのはエゾイソアイナメ（通称どんこ）で、簡単に下処理し味噌汁にして食べると非常に美味である。また、波がある日は夜明け前に起床し、沿岸センターから少し北にある浪板海岸で波乗りを楽しんだ。海で波を待っていると時おり山田線を走っている電車が見えるのだが、運行本数がとても少ないため、それを時計代わりにして研究室へ向かったものだった。

このように大槌では、釣りや波乗りなどをはじめ私生活でも海と親しんでいただけに、沿岸センターをはじめ大槌が大津波に飲み込まれていくのを目の当たりにしたときは現実として受け入れられず悪夢を見ているかのようだった。幸いにも私は多くの人に助けられ、津波・火事から逃れることができたが、博士論文になる前の研究成果が詰まったパソコン・書類などのほとんどのものが津波に飲み込まれた。しばらく経ってから波が引いた後の研究室の中から錆びたUSBメモリを見つけ、それから運良くデータを取りだすことができたが、あの地震・津波で研究生活が終わっても何らおかしくなかっただろう。

地震と津波によって沿岸センターは甚大な被害を受けたため、大槌の学生はみな柏キャンパスに移動することになった。あれから2年近くたった今でも、大槌で学生生活を送った貴重な経験はいつも心の中にあり私の財産となっている。私を育ててくれた大槌町と沿岸センターが少しでも早く復興し、学生たちがまた大槌に集まり大いに活躍してくれることを心から願ってやまない。私自身も、大槌にお世話になった人間として、そして岩手県沿岸を故郷とする人間として何らかの形で復興に貢献していきたい。

沿岸センターと蓬莱島をつないでいた堤防で海を眺める筆者（左）と釣りを楽しむ同期の勝又信博君。豊かな自然とたくさんの人に恵まれて贅沢な学生生活をおくることができた。（2008年7月28日撮影）

## かわべコラム

### 過去は変えられない、未来は変えられる

Never Say Goodbye

国際沿岸海洋研究センター専門職員・川辺幸一です。大槌町にある沿岸センターで震災に遭いました。今は、釜石市から提供を受けた仮設住宅に住み、そこから大槌町中央公民館内にある復興準備室に通勤しています。

大槌町では長く厳しい冬が終わり、遅い春を迎えようとしています。

震災から2年が過ぎ、街中の瓦礫もほぼ片付き、仮設店舗ですが様々なお店も見受けられるようになりました。しかし町民のほとんどはいまだに仮設住宅に住み、不便な生活が続いています。待ち望まれている災害公営住宅の建設なども、もう少し先のことになりそうです。沿岸センターに関しても、被災した建物を最低限の補修をしつつ使用している状態が続いています。

私事ですが、3月末で大槌町（国際沿岸海洋研究センター）を離れる事となりました。震災を前後して過ごした3年間、大槌町は「心のふるさと」となりました。カラダは離れますが、心は常に大槌町にあります。

皆様におかれましても、引き続き大槌町ならびに国際沿岸海洋研究センターの復興にご支援下さい。

今までこのコラムにお付き合い頂き、ありがとうございました。

城山公園から一望する大槌町の様子（2013年3月29日撮影）

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

# インタープリターズ・バイブル 第69回

大学院情報学環 教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門
佐倉 統

## 福島原発事故が突きつけたこと

東日本大震災から、2年が経った。未曾有の大地震と原発事故後の大混乱は、科学技術コミュニケーションにも大きな課題を残し、それらは解決されないまま、今にいたっている。

たとえば、放射線の低線量被曝による健康リスクをどう評価し、どう人々に伝えるかは、今でも合意が形成されないまま、安全だ、いや危険だ、と論争や対立が続いている。

この問題は、しばしば、「科学だけでは扱えない不確実性の問題」とか、「専門家の間でもデータの評価が一致しない状況」などと評されている。しかし、このような見方は、少しずれていて、ひょっとすると事の本質を見誤らせることになるような気がしている。

各分野の専門家は、それぞれの領域で確立された手法と考えかたに則って、事態を評価する。しかし低線量被曝の健康リスク評価には、さまざまな専門領域が同じ程度に関わっている。放射線の測定、疫学、分子生物学、リスク・コミュニケーションなど。それぞれに、重視するデータや依拠する方法が異なり、したがって、リスクの評価も異なってくる。ある分野については、確実に判断でき、一定の結論が出せることでも、別の分野からしてみれば、別の結論が同じように確実に判断される。

つまりこれは、不確実性の問題というよりも、確実だけれども結論が異なる問題といった方がよいのではないかと思う。それぞれの分野の専門家は、確実な知識を主張しているのである。だからこそ、互いに一歩も引かず、対立するのではないか。

もしそうだとすると、これは根が深い。不確実性の問題だというのであれば、判断を慎重にすればすむ。しかし、それぞれが異なる確実性にもとづいて意見を述べているのであれば、どのような判断を下すのが妥当であるか、単純には決められないことになる。

人類は、より正確で合理的に現象を解釈し、それに適した判断を下すために、領域の専門分化を進め、専門的技能に特化した方法を開発してきた。原発問題は、ひょっとすると、この方法が通用しない現象なのかもしれない。

科学にとって、人類にとって、正念場である。

**科学技術インタープリター養成プログラム**
http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/

# ワタシのオシゴト 第86回

RELAY COLUMN

大気海洋研究所広報室特任専門員 佐伯かおる

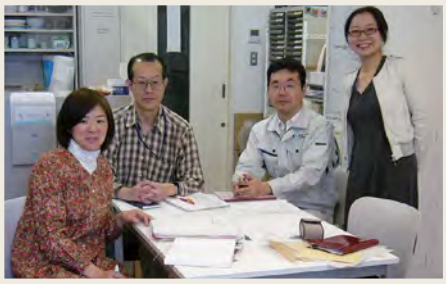
## みえないところではたらいてます

建造中の研究船を見学しに行った下関の造船所で

2010年4月に、大気海洋研究所で広報室を本格的に立ち上げるにあたって職員として採用してもらい、今にいたります。それまでは出版社で専門書を編集する仕事を十数年間していました。

広報室の主な業務は、研究所の印刷物づくり、イベントの運営、ウェブサイトの管理などです。わかりやすいところで言えば、この『学内広報』のコラム「ひょうたん島通信」(←隣のページに載ってますね！)を誰に執筆してもらうか考え、執筆を依頼して、原稿内容をチェックして本部広報課へお渡しするというのも、実はわれわれが担当しています。

この編集者という存在は外から見えにくくて、「書いた文章をメールで送ればそのまま本になるんじゃないの？　何をする人なの？」と聞かれたことがあるくらいです。でも、目立たないところにいて、文章を書いてくださる方やイベント等で人前に立たれる方を、かっこよく表に出し、読者や参加者とつなぐことに徹する。それがこの仕事をする者としての美意識です。



メンバー集合！　左から渡辺さん、道田先生、森山さん、私

得意ワザ：タロット占いによる人生相談
自分の性格：このごろ固有名詞を思い出せない
次回執筆者のご指名：福田祐子さん
次回執筆者との関係：同じ建物の中にいるのに電話で5時間しゃべったことがある

# Policy + alt

政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心にお届けします。

政策ビジョン研究センター　第43回

渡部 俊也　政策ビジョン研究センター 教授

## 大学と社会の関係構築

大学の役割に、教育と学術研究に加えて、研究成果を企業に直接移転する産学連携が加えられるようになったのは、2000年以降のことである。その考え方は米国がモデルになっている。その後、国立大学では2004年に法人化が行われ、名実とも、組織として社会との関係を構築することになった。以降、大学は大学法人として多くの特許出願や技術移転を行い、企業との共同研究の件数も増加した。

しかし、国際比較を行うと、日本の産学連携の成果は、諸外国よりも劣るという結果になってしまう。中でも高い効率を誇る米国では、最大GDPの0.6%程度の貢献があるとする試算もある。一方、米国大学と企業との間には緊張関係も存在する。米国の大学は、企業に対して100件以上の特許訴訟を提起してきており、企業にとってはやっかいな存在でもある。いずれにしても、米国をモデルとしたはずの日本の大学と社会との関係は、現状は米国とは大きく異なっている。

大学という存在が、社会とどのような関係を構築するべきなのか、イノベーションシステムとしては日米どちらがより望ましいのか、については、従来十分研究されてきたとはいえない。教員や学術コミュニティーのネットワークに埋め込まれている大学の特性を踏まえて、より望ましい大学と社会との関係を模索していく必要がある。大学と社会の研究ユニットは、このような狙いを背景に、イノベーションシステムとしての大学と社会の関係について研究を行っていく。

米国をモデルにした産学連携の試みが日本でも同じ結果をもたらしているとは限らない。（インタビューに応える渡部教授）

http://pari.u-tokyo.ac.jp

# Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部　第89回

## ビジネスプラン、192名の記録

～アントレプレナー道場ものがたり～

「大学・学生が世界を変える！」をキャッチフレーズに、当本部が運営する学生起業家教育プログラム「東京大学アントレプレナー道場」（以下、アントレプレナー道場）。第8期目となる2012年度までに約1,400名を超える本学の学生が参加し、プログラムの上級コースへ進んだ192名が最終審査・発表会においてビジネスプランを発表しています。

今回ご紹介するのは、その192名のアントレプレナー道場生による奮闘記ともいえる活動の記録「東京大学アントレプレナー道場ものがたり」です。道場生に好評の社会人メンターを指南役としたメンタリングシステムをはじめ、混成チームにより事業提案することでグローバルな視点とチームワークが培われる北京大学とのビジネスプラン交流、そして第一線で活躍する起業家の講義等を通じて、刺激や多様性を吸収しながら学生が成長を遂げていく様子を盛りだくさんに掲載。特に、各チームのインタビュー記事では、インタビューを通して語られる学生のみなさんの声を通して、大学の通常の講義とは異なるこの教育プログラムが、学生にどのように受け入れられ、教育においても成果を上げているのかがお分かりいただけます。

2005年の第1期開催以来、世界に打って出られるような人材の育成を目指す中で、あてがわれた問題を解決するのではなく、自ら問題を発見して解決することができる胆力を養う訓練の場として捉え、プログラムを展開してきたこのアントレプレナー道場。実際に起業したり、起業に参画した道場生は約50名に上ります。今期を含め、8年間に及ぶ活動記録についても当本部のWebサイトに掲載しました。体当たりでプログラムに挑んだ道場生192名の成長の記録、ぜひご覧ください！

「第8期東京大学アントレプレナー道場ものがたり」はコチラ！☞ http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/jp/venture/dojo/story_8/index.html

http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/

# 救援・復興支援室より

第23回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

## 救援・復興支援室の活動（3月）

| | |
|---|---|
| 3月21日 | 平成 24 年度東日本大震災ボランティア支援活動記録をウェブサイト掲載 |
| 3月28日 | 登録プロジェクト更新（新規１件） |

## 遠野分室ものがたり

本部企画課係長（遠野分室勤務）　文：**赤崎 公一**

「焼肉＝ジンギスカン」。

ジンギスカンと言えば北海道を連想させますが、実はここ遠野市でも食の名物の一つとなっています。

市内の肉屋やスーパーでは、生の羊肉が当たり前のように売られており、一人当たりの羊肉消費量で北海道と一、二を争うほどとか。

羊のいない遠野市で何故ジンギスカン？と思い、遠野ジンギスカンの元祖と言われる専門店で聞いたところ、昭和30年頃からお店で出すようになったそうです。当時は、どこの民家でも羊毛を取るための養羊が盛んだった為、新鮮な食材が調達できたこともジンギスカンが盛んな街になった要因だとか。但し、当時は全国的に羊肉を食べる習慣があまりなかった事から「羊の肉食べてるの？」と笑われたそうです。

ジンギスカン専門店の元祖を調べてみると、意外にも北海道ではなく東京で、昭和10年に「成吉思荘」という店舗を設けたのがはじめのようです。

遠野市を訪れた際には、是非一度ご賞味下さい。

どんどはれ・・

遠野ジンギスカン

http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html
Email：kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
内線：21750（本部企画課）

# 東大オフィシャルショップ コミュニケーションセンターだより 特別版

第93回

## 春の注目新商品が続々登場!

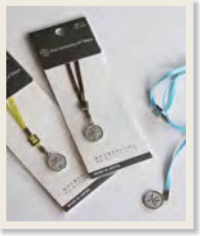
東大の研究活動から生まれた商品や、東大ならではの公式グッズをお届けする東京大学コミュニケーションセンター。赤門横のお店に並ぶ多彩なラインナップの中から、この春注目の商品を厳選して紹介します！

### 「パールコラーゲン」のボディミルク&マスク

農学生命科学研究科・渡部終五教授らによる真珠貝研究から、保湿効果バッチリのフェイスマスクとボディミルクが誕生しました。あなたの口元とお肌に、本学伝統の真珠研究が結実した「パールコラーゲン」のしっとり感を！　マスク￥500／ミルク￥1500（税込）

### 「本から落ちないしおり」 数量限定

表紙に装着すると本と一体化してはずれない仕組みを備える、読書家注目のしおりです【製造（株）幸道（特許第4084182号）】。色は東大カラーの青と黄（と茶色）。しおり紛失の心配がないだけでなく、UTマークのチャームが知的な雰囲気演出にも好適!?　￥630（税込）



### 傷跡が回復するスマートフォンケース 数量限定

軽微な傷がついても傷跡が瞬時に回復してしまうのは、新領域創成科学研究科・伊藤耕三研究室が発見した「スライドリングマテリアル」由来の耐傷性塗料でボディがコーティングされているから。iPhone5を大切に使いたいならこれでキマリ。　￥2800（税込）

### 赤門や安田講堂の姿が記念切手に 数量限定

赤門、安田講堂、銀杏並木、総合図書館といった、季節感あふれる本郷キャンパスの名所写真が、50円×10枚のオリジナルフレーム記念切手シートになりました。便利なシール式なので、切手の裏を舌でなめたりしなくても大丈夫なのです。￥1500（税込）

**贈答品、記念品など お気軽にお問い合わせください！**

http://shop.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp/
10:00~18:00（月～土）　03-5841-1039

## トピックス

全学ホームページの「トピックス」(http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/) に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとして簡単にご紹介します。それぞれの記事の詳細は、全学ホームページよりご覧ください。

| 掲載日 | 担当部署 | タイトル | 実施日 |
|---|---|---|---|
| 3月18日 | 産学連携本部 | 東京大学産学連携協議会「アドバイザリーボードミーティング」「年次総会」を開催 | 2013年3月6日 |
| 3月19日 | 低温センター | 第 4 回 低温センター研究交流会開催報告 | 2013年3月7日 |
| 3月19日 | 宇宙線研究所 | 宇宙・素粒子スプリングスクール 2013 が開催されました | 2013年3月4日 |
| 3月19日 | 総合研究博物館 | 3 月 21 日「インターメディアテク」オープン | 2013年3月21日 |
| 3月19日 | TSCP 室 | 東大サステイナブルキャンパスプロジェクト TSCP2012 低炭素化目標（非実験系 15% 削減）を達成 | 2013年3月14日 |
| 3月26日 | 本部留学生・外国人研究者支援課 | 東京大学卒業・修了予定の外国人留学生、留学生支援団体等と総長との懇談会 | 2013年3月7日 |
| 3月28日 | 大学院農学生命科学研究科・農学部 | 文部科学省創薬等支援技術基盤プラットフォーム事務局開設報告会 | 2013年3月19日 |
| 4月1日 | 本部国際交流課 | 学部学生 32 名が JICA 短期ボランティアプログラムに参加しました | 2013年3月4日 |
| 4月2日 | 本部学生支援課 | 全日本学生グライダー競技選手権　個人総合優勝 | 2013年2月28日 |
| 4月2日 | 本部総務課 | 平成 24 年度卒業式、学位記授与式 | 2013年3月25日 |
| 4月3日 | 本部留学生・外国人研究者支援課 | 東京大学アサツー ディ・ケイ中国育英基金奨学生大学院修士課程修了報告会 | 2013年3月7日 |
| 4月4日 | TSCP 室 | ワットセンス・アワード 2012「エコ・リーグ賞」受賞 | 2013年3月29日 |
| 4月5日 | 本部学生支援課 | 平成 24 年度　学生表彰「東京大学総長賞」授与式の挙行 | 2013年3月21日 |
| 4月9日 | 政策ビジョン研究センター | 本部棟 1 階展示 | 2013年4月2日 |
| 4月11日 | 分子細胞生物学研究所 | 平成 24 年度分子細胞生物学研究所・医科学研究所合同技術発表会を終えて | 2013年3月4日 |
| 4月15日 | 柏地区共通事務センター | 福井文部科学副大臣が本学柏キャンパスを視察 | 2013年4月8日 |
| 4月15日 | 本部総務課 | 平成 25 年度学部入学式・大学院入学式 | 2013年4月12日 |

(3月16日〜4月15日掲載分)

## お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/)・東大ポータル等でご案内しているさまざまなお知らせを一部掲載いたします。

| 掲載日 | 担当部署 | タイトル | URL |
|---|---|---|---|
| 4月1日 | 本部人事給与課 | 人事異動（教員） | http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/ 人事異動（教員） |
| 4月15日 | 広報室 | 部局長の交代のお知らせ | http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/374/ |

## CLOSE UP　平成24年度　学生表彰「東京大学総長賞」授与式の挙行

授与式　受賞者集合写真

授与式　髙橋さんによるプレゼン

平成24年度学生表彰「東京大学総長賞」授与式が、3月21日（木）午後5時から小柴ホールにおいて、実施されました。

本年度から、すべての分野で年に一度選考を行うこととし、課外活動・社会活動等の分野では2団体が、学業分野からは8名が受賞しました。

また、本学の名誉を高め、学生の範となる功績が特に顕著であった団体・個人に授与される、「東京大学総長大賞」には、課外活動・社会活動等の分野で、本学卒業生と連携し東日本大震災の被災地域へ延べ2000名を超えるボランティアを派遣した「東大-東北復興エイド（UT-Aid）」、学業分野で、生体内の酸素環境を可逆的に検出するプローブ試薬の開発に成功した、髙橋翔大さん（薬学部）が受賞しました。

総長から受賞者へ表彰状と記念品の贈呈、お祝いの言葉が送られた後、各受賞者から今回の受賞内容に関するプレゼンテーションが行われました。本学学生や教職員、受賞者関係者等、約150名が参加し、活躍と功績を讃えました。受賞者のこれからのさらなる活躍が期待されます。

詳しくは本学ホームページ「トピックス」や、以下の総長賞ホームページをご覧ください。
http://www.u-tokyo.ac.jp/stu01/h12_03_j.html

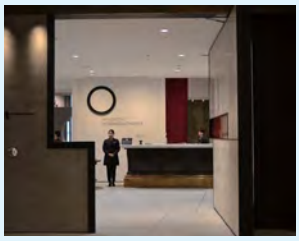
## 部局長交代のお知らせ

2013年4月1日付で、下記の通り部局長の交代がありました。新部局長の略歴・前部局長の退任挨拶は左記「お知らせ」のURLをご覧ください。

| | 新部局長 | 前部局長 |
|---|---|---|
| 大学院医学系研究科長・医学部長 | 宮園 浩平 | （再任） |
| 医学部附属病院長 | 門脇 孝 | （再任） |
| 大学院人文社会系研究科長・文学部長 | 小佐野 重利 | 中地 義和 |
| 大学院農学生命科学研究科長・農学部長 | 古谷 研 | 長澤 寛道 |
| 大学院教育学研究科長・教育学部長 | 南風原 朝和 | 市川 伸一 |
| 大学院新領域創成科学研究科長 | 武田 展雄 | 上田 卓也 |
| 大学院情報理工学系研究科長 | 坂井 修一 | 萩谷 昌己 |
| 医科学研究所長 | 清野 宏 | （再任） |
| 地震研究所長 | 小屋口 剛博 | （再任） |
| 史料編纂所長 | 久留島 典子 | 榎原 雅治 |
| 分子細胞生物学研究所長 | 秋山 徹 | （再任） |
| 物性研究所長 | 瀧川 仁 | 家 泰弘 |
| 大気海洋研究所長 | 新野 宏 | （再任） |
| 先端科学技術研究センター所長 | 西村 幸夫 | 中野 義昭 |

## CLOSE UP　3月21日「インターメディアテク」オープン

常設展示／Made in UMUT-東京大学コレクション



エントランス

3月21日（木）東京駅前JPタワー内旧東京中央郵便局舎2･3階に、新たなミュージアム「インターメディアテク」(IMT)が開館しました。IMTは日本郵便株式会社と東京大学総合研究博物館が協働で運営をおこなう公共貢献施設です。本学が開学以来蓄積してきた学術標本や研究資料など、「学術文化財」と呼ばれるものの常設展示をはじめ、特別展示や複合教育プログラムを展開いたします。

所在地：千代田区丸の内2-7-2 JPタワー 2･3階
開館時間：11:00 - 18:00
＊入館は閉館時間の30分前まで
＊上記時間は変更する場合があります。
定休日：月曜日（祝日の場合は翌日休館）、年末年始、その他館が定める日
入館料：無料

## 五月祭開催のお知らせ

昨年の安田講堂前銀杏並木。例年10万人以上の来場者で賑わいます
〔HP〕http://www.a103.net/may/

五月祭は、毎年5月に東京大学の本郷キャンパスで開催される学園祭です。3・4年生が多く参加するため研究展示が盛んで、国際色豊かな模擬店も魅力です。委員会イチ押しのお笑いライブや近未来体験などの多彩な企画が祭りを盛り上げます！学生・教職員、一般の皆様、ご来場を心よりお待ちしております。

**◆第86回五月祭◆**
**2013年5月18日(土)・19日(日)**

# 淡青評論

七徳堂鬼瓦

## 世界の街角で思ったこと

最近1ヶ月間にインドのデリーから始まって、オーストラリアのキャンベラ、デンマークのコペンハーゲン＋スウェーデンのルンドと訪問する機会があり、図らずも短期間に東西南北の大小都市の人々の表情を見比べることになった。

雑踏に満ちたデリーにあふれる人々は、親しげに話しかけてくるが、せわしそうな態度はどことなく不安げ、表情もやや険しい。キャンベラはそもそも街の作りがゆったりで、人も車も密度が圧倒的に小さく、その中で人々は気ままに暮らしているように映る。コペンハーゲンは大都市の猥雑さをにじませ、慌ただしい。自転車は例外なく猛スピードで走り抜け、人々は東京並みに速く歩いている。ルンドは小さな町ながら古都の面影を残し、現在は北欧最大のルンド大学の町として知られる。観光客と学生で賑わいを見せる一方、人々は物静かな表情で行き来する。そして成田に帰り着いて思うのは、都市のダイナミクスを感じさせながら、人々がみな同じような無表情さで歩いている姿の不思議さである。

私が現在関わる「サステイナビリティ学グローバルリーダー養成大学院プログラム」は、世界20カ国以上から多様な専門分野の学生を受け入れて、「サステイナビリティ学」に関わる教育をすべて英語で実施している修士・博士課程である。さまざまな国や分野の学生と教員が刺激し合うことを重視した教育を実施してきた。私が見たさまざまな都市の表情の裏にある現実を見据え、そこから人類全体の共存の道を探っているとも言える。

人と人との関係において、自分に無いものへの羨望とかその正反対の嫌悪感とか否定的な感情がのぞくのを押さえて，異質な人々と共有できるものを探そうと努力する態度は、サステイナビリティを目指す社会では重要だと思う。さまざまな都市の表情を見ていて、私自身がいつもそれをできるわけではないことを自覚する。文化や学問領域や考え方の違いをポジティブに受け入れることのできる感性を育てることがこれからの教育にとても重要なことなのではないかとあらためて考えた次第である。

味埜俊
（大学院新領域創成科学研究科）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報課を通じて行ってください。

東京大学広報室
no.1438 2013年4月23日

〒113-8654　東京都文京区本郷７丁目３番１号
東京大学本部広報課 TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhoukikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
http://www.u-tokyo.ac.jp